

「やめる」と言える自分をつくる：

「矯正教育プログラム（薬物非行）」の質的分析（2）*

南 保輔

論文要旨

本論は、覚せい剤からの断薬意志を、約1年にわたる少年院生活においてある女子少年がどのように確立していったかを、多角的なデータを提示しながら記述するものである。

B少年は、覚せい剤使用で逮捕されてX女子少年院で矯正教育プログラム（薬物非行）を受講した。3か月にわたるプログラムの開始にあたって、B少年はやめたい気持ちが10%で、やめる自信は5%だと述べた。なかなか「やめる」と言えないでいたが、プログラムが終わるときに「やめたい」と言えればいいのだと助言された。この助言は一見すると適切で効果的なものであり、B少年の回復は大きく進むかと思われたが、そうはいかなかった。かつて再使用することで裏切った母親の信頼を取り戻したいのだが、「やめる」と「やめたい」の違いが母親から理解されなかったからだ。

出院直前の回顧的自己評定によると、この助言があった直後に気持ちは大きく落ち込んでいた。母親との関係改善、とくに母親の信頼を得るという課題がまったく進まなかったからだ。家族関係はほとんどの少年の事例において、少年院での指導の重点となる。B少年の場合はプログラムがあったために、その終了後までこの点への取り組みが先延ばしされた。プログラム中心の調査において、母親との関係に大きな問題を抱えているということは可視化されず、助言の威力を過大評価することになった。

回復が進むにつれて、課題が変わっていくという側面も見られた。プログラムを通じて対処法を学んだからこそ、薬物をやめられるかもしれないとB少年は感じるようになった。そうなったときに、「一生やめる」と宣言することはできないとしても、「今日一日やめる」と考え、そう言えるようになっていた。

本論では、授業場面の録画とインタビュー、そしてインタビュー時に作成してもらったグラフを主要データとする。そのデータが記述している現象と経験の範囲や性質という側面からの検討を補助的な軸とする。

キーワード：断薬意志、やめる自信、自己評定、自己報告、相互作用分析

10パーセントぐらいです、やめたい気持ち。やめる自信は5パーセントぐらいしかないですね。
(B少年のことは)

やめれるって断言するのと、やめたいってゆうのはやっぱ違うと思うんですよ。だからやめたいっていえばいいんですよ。

(臨床心理士のことは)

1 「やめる自信は5パーセント」

薬物依存者にとって、薬物使用をやめる（断薬）のは容易なことではない。「依存」ということは、まさにそのような状況にあるということを表現している。覚せい剤使用で2度目の少年院送致となったB少年も、「やめる」と言えるようになるまでに紆余曲折があった。

依存の程度がはなはだしかったB少年の場合、逮捕されてX女子少年院に送られた当初は、「やめられてうれしい」と感じていた。だが、そのような「ハネムーン期」をすぎると、薬物への欲求、渴望感が強まる。薬物をやめたい気持ちが10パーセントで、やめる自信は5パーセントとB少年が言ったのはそのような時期だった¹⁾。

B少年はその後、薬物離脱指導のプログラムを受講し、「今日一日やめる」ことならできると感じて少年院出院の日を迎えた。本論文では、さまざまな種類の調査データを活用して、B少年の軌跡をたどる。冒頭の臨床心理士の助言は、プログラムのグループワークにおいて、B少年の抱える悩みを解決するものとして提示された。しかしながら、B少年が「やめる」と普通に言えるようになるまでには、その後3か月ほどの時間が必要だった。この助言を活用し、母親との関係改善に取り組みつつ、「自分のためにやめる」という意味づけをB少年はかためた。本論は、「いまここ」の相互作用の記録とインタビュー、そして回顧的自己評定をもとに、断薬意志形成の複合性を描き出すものである。

1節では、調査対象のプログラムの概要、われわれの調査とデータについて簡単に紹介する。そして、B少年が少年院で取り組んだ断薬に向けての課題とB少年が置かれた状況を述べる。2節において、B少年の課題にたいする一つの解決策が提示された場面を検討し、それが直ちに受けいれ

られるものではなかったというB少年の事情を見る。一見すると解決策、「ターニングポイント」と見えたものが直ちにそうなるわけではないということだ。3節では、約1年にわたる少年院生活を総括するデータを検討する。出院直前のインタビュー調査時に少年院生活を回顧し、その浮き沈みの自己評定をしてもらった。このグラフの上下変動について、口頭での説明も求めた。「薬物に関する気持ち」と一口に言っても、照準し前景化している側面はB少年がそのときどきに直面している課題に応じて変化しているということがうかがえた。

4節と5節では、対象とする期間が絞られた2種類のデータを取り上げる。プログラム実施中に行われた1週間ごとの振り返りと、1か月前後の間隔で実施されたわれわれによるフォローアップインタビューである。前者は体調や気分と、薬物への欲求に関する、具体的なものだ。対照的に、後者はほぼ1か月にわたる期間の変化をたずねたものである。特に、後者のデータからは回顧的自己評定との対比が興味深く見られた。

最後に、要約とB少年事例の特殊性をまとめ、学術的含意を整理して結びとする。

1-1 矯正教育プログラム（薬物非行）とB少年

本論では、女子少年院での「矯正教育プログラム（薬物非行）」を受講したB少年の事例を取り上げる。少年院においては、被収容者は男女を問わずに「少年」と呼ばれる。B少年は女性である。まず、このプログラムの概要を説明する。なお、プログラムの全容とその誕生の経緯などは以下に詳しく、本論の議論はこれを元に行っている（平井；南2014）。

矯正教育プログラム（薬物非行）は、認知行動

療法の一類型であり、物質使用の治療に効果的とされる「リラプス・プリベンション」にもとづく、グループワークを主体とした12回のプログラムを「中核プログラム」としている。教材として『J. MARPP』が使われているが、これは『SMARPP (Serigaya Methamphetamine Relapse Prevention Program)』を元に作成されたものだ(『SMARPP』の一般に入手可能なバージョンとして、松本他 2011がある。2015年にはその改訂版である松本；今村 2015が出た)。

矯正教育プログラム(薬物非行)は、中核プログラムと選択的プログラムからなっている。選択的プログラムには、対人スキル指導や家族問題指導、進路指導、職業補導など、従来から少年院において実施されてきた教育プログラムが数多く配備されている。本論が取り上げるX女子少年院における矯正教育プログラム(薬物非行)では、これらのほかに、アサーションを中心とした対人トレーニング、ミーティング、アンガーマネジメント、ダルク講話などが盛り込まれている。

B少年が前回少年院に入ったときは、矯正教育プログラム(薬物非行)(以下、「プログラム」とする)のようなものはなかった。本人によると、模範的な少年院生を「演じて」、覚せい剤は「一生やらない」と宣言して出院した(5-6で詳しく論じる)。しかし、出院後覚せい剤に再び手を出してしまい、本論で取り上げる2度目の少年院送致となった。

1-2 調査とデータ

X女子少年院において2013年6月から9月にかけて実施された矯正教育プログラム(薬物非行)の3つの授業(ミーティング、アサーションを中心とした対人トレーニング、グループワーク)すべてが、少年院職員によって撮影、録画さ

れた。調査チームの平井と南とは交替で、プログラム期間中はほぼ毎週X女子少年院に向いて、録画記録を回収するとともに、プログラム受講少年とプログラム担当教官、首席専門官にインタビューを行った。プログラム終了後は、月1回を目安にフォローアップインタビューを実施した。B少年に対しては、プログラム期間中に11回、プログラム終了後は6回、合計で17回のインタビューとなった。授業の録画とインタビュー録音とは、文字起こしして基本データとしている(調査とデータの詳細についても、平井；南 2014を参照)。

なお、B少年といっしょにプログラムを受講した少年たちの依存薬物は、大麻(マリファナ)、危険ドラッグ(当時は「脱法ドラッグ」と呼ばれていた)、有機溶剤(シンナー)、そして覚せい剤とさまざまであった。プログラムにおいては、特定する必要があるときをのぞいて、総称的に「薬物」という言い方がなされていた。B少年の場合、主たる依存薬物は覚せい剤であり、「薬物」や「クスリ」と言っているときもふつうは覚せい剤を指すものと理解される。

1-3 プログラム開始時点の気持ち

プログラムが始まって第1週、初回のグループワークで、受講少年たちは薬物をやめたい気持ちとやめる自信を評定するように求められた。教材であるワークブックで、両端に「0%」と「100%」と書かれた線分上にチェックするものである。

- ① 今、君は薬物をやめたいと思っていますか？それともやめたくないと思っていますか？下のグラフに印を付けるとしたら、どのあたりになりますか。
- ② 薬物をやめたい気持ちはどれくらいでした

か。どのあたりに印を付けることができましたか。そこに付けたのはどうしてでしょうか。

③ 薬物をやめる自信について、下のグラフに印を付けるとしたら、どのあたりになりますか。

④ 薬物をやめる自信はどれくらいありましたか。どのあたりに印を付けることができましたか。そこに付けたのはどうしてでしょうか。

設問は上記のように4つあるが、評定に関わるものは①と③の2つである。ひとつめ(①)の線分の左端「0%」の下に「絶対にやめたくない、または、何とかして使いたい」とあり、右端「100%」の下には「絶対にやめたい、または、何とかしてやめたい」、そして真ん中に「できればやめたい」とある。ふたつめ(③)の線分の左端「0%」の下に「必ず使う」、右端「100%」の下に「必ずやめる」と書かれている。

これらの設問に答えて、B少年は「やめたい」気持ちが10パーセントで、「やめる」自信は5パーセントしかないと言う(抜粋1。この部分の全体は抜粋付1として論文末に掲載した)。

抜粋1 「やめたい気持ち」が10%で、「やめる自信」が5%²⁾

(グループワーク1 [1:22:34-1:24:00])

B: °なんか(0.2) え:と:<1番10パーセントぐらいです。>°(略)つと: やめる自信は:(0.4) 5パーセントぐらいしかないの °かな:あの°

「1番10パーセントぐらいです」という部分の発話は機械的な印象を与える。それぞれの音がボ

ツボツと、まるでパソコンで合成されているかのように聞こえる。かなり小声でもある。そのあとになぜ10パーセントかという理由が続くが、その部分が大声で気持ちがこもっているのとは対照的である。そして、「やめる自信は:」という部分からまた小声となっていく。「しかないのかな:あの°」というところ、とくに「かな:あの°」は消え入るような音量になっている。

1-4 自信がくずれた経験

B少年がやめる自信は5パーセントと感じ、そのことをまさに自信なさそうに小声で発言しているのは、かつての経験があるからだ。前回の少年院を出るときにB少年は、「ぜったいやめれる」、「自信100パーセント」と考えていた(抜粋付2)。「クスリなくても生活していける」と信じていたのだが、「いろんなきっかけがあって」B少年は再使用してしまった。この経験はB少年にとって大きなショックとなっている。

再使用の原因というわけではないが、「自信ない」と言って「自分のありのままの姿を認めて」いたら違っていたのではないかと考えている。抜粋2は抜粋付2のうちの最後の部分である。

抜粋2 「100パーセントやめます」と言わなければ良かった

(グループワーク1 [1:25:21-1:25:52])

B: .hh そのときに:なんかいま:(0.6) は:かえってもう5パーセントとか10パーセントとしかないけど前は:ほんまに100パーセントって思って(0.8) あんときに:(0.4) 自分の:ほんとの姿 >さっきゆってたみたいに:そのプログラムやってみて自分の弱さも知ったってゆってたじゃないですか:<そ:ゆ:ふうに:前のときに:.hh 自分のありのままの姿を認め

てあげることができた > 100パーセントやり
- やめ - やめますみたいなくゆわんと：(0.4)
自信ない：とか (0.4) 自分の姿をみれてたら：
もうちょつと変わったたかなっと思う部分あ
るんですよ。

実は、抜粋付2の部分は、受講者仲間のA少年
にたいしての発言である。A少年は、やめたい気
持ちは55パーセントでやめる自信は25パーセン
トと回答した。それに続いて、このプログラムが
始まるまえには100パーセントだったのが、プロ
グラムが始まって不安が出てきたと述べた。5人
の受講者のなかで最後にやめたい気持ちとやめる
自信を発表したB少年が、A少年の不安な気持ち
を踏まえて発言したのが抜粋2の部分である。

B少年がA少年にたいしていちばん伝えたかつ
たのは、最後の、「自分のありのままの姿を認め
てあげる」という部分であろう。自身が再使用し
てしまったことと、「ありのままの姿」を認める
ことなく「100パーセント」と思い込んでしまっ
たことはつながっている。やめたい気持ちが10
パーセントでやめる自信は5パーセントとB少年
が述べることは、このような過去の反省にたつて
のものだと理解される。

このように、B少年の課題は、やめる自信がな
くて「やめたい」あるいは「やめる」と言えない
ことである。この時点から約9か月後には、「今
日一日やめる」と断薬意志を確立して出院を迎
えるまでになった。本論は、そこにいたる軌跡を、
データを示しながらたどるものである。

2 「やめる」と「やめたい」

このプログラム受講者は当初6人だった。その
うちの1人は早々にプログラムから脱落した。残
り5人のうち1人からは調査協力が得られなかつ

たので、われわれの研究は4人についての情報を
データとしている。その4人のうち、B少年をの
ぞく3人は初めての少年院である。少年院入院が
2度目であることに加えて、依存薬物が覚せい剤
であるという点からも、「やめる」と宣言するこ
とはB少年にとってなかなかできないことの方
だった。

われわれの調査では、B少年を含む人びとから
直接にインタビューで話を聞くことができた。そ
の一方で、授業については映像記録を介してやり
とりの詳細を知ることになった。そのなかで、B
少年のやめる宣言に関する助言がグループワーク
の最終回になされた。それは、外部の専門家であ
るO臨床心理士からの、やめれるではなくて「『や
めたい』っていえばいい」というものだった。本
節では、このやりとりを検討する。少年が直面し
ている難題にたいする効果的な助言が提示された
場面と見えるものだからだ。

2-1 「『やめたい』っていえばいい」

ここで取り上げる「『やめたい』っていえばいい
」という発言が見られるのは抜粋3の部分であ
る。この部分で際立っているのは、B少年が応答
をするまえに1秒弱の間隙が5回中3回に見られ
ることだ。

抜粋3 「『やめたい』っていえばいい」

(グループワーク12 [40:35-41:13])

- 01 O: あ: : : なの: : : あの<やめれ↑
02 >って断言するのと: : <やめたい>
03 ってゆうのはやっぱちがうと思うん
04 ですよ。
05 B: ふ: ん
06 O: やめたい気持ちはあるんですね?
07 (0.8)

08 B: °ん:ん°
 09 O: やめたいってゆう気持ちを:に正直
 10 になるのと:<やめれる>と確信す
 11 るのはぜんぜん違う。
 12 (0.8)
 13 B: あ:[:
 14 O: [はなし:なので:やめたい気
 15 持ちはあります。でも:(0.4)今
 16 やめたいと思ってるだけで未来のこ
 17 とはわからない。で>やめれるかど
 18 うかって断言する<それって<べつ
 19 な(の)。
 20 B: は:[::
 21 O: [ことですよ。だからやめ
 22 た↑っていいばいいんですよ。
 23 (0.7)
 24 B: ん:
 25 O: >やめたい気持ちがあるくっていえ
 26 ば:いいけど:<やめれる>かどう
 27 かってゆうの未来のことでわからな
 28 いから:

B少年がどのように受けとめるかがここでの論点だが、その対象となる命題をまず確認しよう。この部分では、命題リスト1の3つの命題が問題となっている。

命題リスト1 O臨床心理士の発言

- 命題1 やめれるとやめたいは違う
 01-04; 09-11, 14; 16-19, 21
 命題2 やめたい気持ちがある
 06; 15-16
 命題3 やめたいと宣言する
 21-22

B少年の5回の応答(05行, 08行, 13行, 20行, 24行)のうち、命題1に関するものが3つで残りは命題2と命題3にそれぞれが応じている³⁾。

3つの命題のうち、比較的すんなりと同意と確認がされたのが命題2である。08行目のB少年の応答「°ん:ん°」は、「やめたい気持ちはあるんですよ」という臨床心理士の問いかけ(06行)にたいして、これを確認するものだ。やめたいと宣言することを臨床心理士は助言しているのだが、やめたいという気持ちがなければそのような宣言をするわけにはいかない。この前提を確認するものである。08行目のB少年の応答は、短い0.8秒の間隙があり(07行)小声でなされているものの、前提である命題2が充足されていることの確認となっている。

そして、24行目の応答「ん:」は、「やめたいっていいばいいんですよ」という助言に肯定的に答えている。そのために、助言は受けとめられB少年はそれを生かすようにしていくのだと聞かれた(命題3)。

残り3回の応答は、命題1に関わるものである。その最初の定式化(01-04行)は、B少年によってさらっと受けとめられる(05行)。臨床心理士によるやめたい気持ちの確認(命題2)は、そのような熱意の感じられない回答を受けて、挿入されたと考えられる。2回目の定式化(09-11, 14行)では、やめれるとやめたいの違いの程度が、「やっぱ違う」から「ぜんぜん違う」へと格上げされている。また、2つの表現も、「やめれるって断言」から「やめれるって確信」へ、そして、「やめたいってゆう」から「やめたいって気持ちに正直になる」と表現が変化している。「断言」と「ゆう(言う)」という発話行為から、「確信」と「気持ちに正直になる」という心理面へと移っている(表1)。B少年の応答は、1回目に

表1 やめるとやめるの3つの定式化

1回目	2回目	3回目
やめると断言	やめると確信	未来にやめられるかどうか断言
やめたいってゆう	やめたいって気持ちに正直になる	いまやめたいと思ってる
やっぱ違う	ぜんぜん違う	べつなこと

比べると2回目の13行（「あ：：」）のほうが思いのこもったものとなっている。さらに、3回目の定式化にたいするものは、そのイントネーションから納得を示すものと聞こえる。また、3回目の定式化では、新たに「未来のことはわからない」（16-17行）という留保が付け加わっている。これは、まさに、「やめると」宣言することに伴うリスクに対応している。やめるとやめたいの違いに関わるものでもある。B少年の納得はこの部分によって引き起こされている可能性がある。

命題1にたいする2回目と3回目の応答は、Heritageのいう「change of state token」と聞くことができるものだ（Heritage 1984）。「やめると」と言うことと「やめたい」と言うことは違うという臨床心理士の命題1の主張に納得したという状態変化を示すものである。臨床心理士は、何度も表現を変えながら、やめたい宣言をB少年にたいして推奨している。B少年の応答も、定式化の繰り返しのたびに深いものとなっているように聞こえる。この抜粋3のやりとりこそが、このようなプログラムの真骨頂をなすものと考えられた。教育指導一般においても、理想的な助言の例となりうるものだ。

2-2 「一般の人」にわかるのか

調査者である南には、録画記録を見てこのように感じられた。臨床心理士もそのように受け取ったものと推察された。だが、実のところはそうではなかった。受け手であるB少年が特定の聞き手

を考えていたからだ。抜粋4は、プログラム終了後1か月ほどしての、フォローアップインタビューのものである。そこでは、伝えたい相手が「おかあさん」とであると明言されている。

抜粋4 おかあさんに対して伝えていきたい

（インタビューF1 [12:43-13:32]）

- 01 B: その:(0.2)「やめたい」と「やめ
02 る」の:その:(0.6) 違って一般そ
03 の一般の人はわかるんですかみたい
04 な話ですよ:(笑)
05 R: そうそう(.) ゆってた:
06 B: ほんならわからへんと思うみた(h)
07 いな:(笑)ん:そ:そ:それで:
08 :なんか:(1.2) まそ-そ:結局そ
09 のなんかわからん:ってゆう感じじゃ
10 ったじゃないですか:
11 R: そうだったと思いますね:=
12 B: =だから:なんか:(1.6) もうお
13 かんさんに対して:(0.4) それ伝えら
14 れるなら(0.4) のであれば:(1.2)
15 伝えていきたいなどは思ったんですけ
16 [ど=
17 R: [う:ん
18 B: =そう>やめるとやめたいの
19 違い?<
20 R: ちが[うね.
21 B: [自分のなかでの違い=やめ
22 られる自信なんてないけ[ど:<

23 R: [けど:ん
 24 B: でもやめれ:る(.)ようになりた
 25 い? (0.4)でそのために:こうゆ
 26 うふうにして欲しいみたいなんとか
 27 も:.hh言えるようになりたいなどは
 28 思うんですけど:(0.6)思ったんです
 29 けど:(1.0)なんですかね:

B少年は、「やめるとやめたいの違い」を、「お
 かあさんに対して:それが伝えられるなら (0.4)
 のであれば:(1.2)伝えていきたいな」(12-15行)
 と思ったと言明している。抜粋3での臨床心理士
 の助言を正面から受けとめるものだ。

ただし、「それが伝えられるのであれば」(13-14
 行)という留保が重要である。つまり、母親には
 容易に理解されないと考えているということだ。
 依存者と対応するという経験が豊富なひと (O臨
 床心理士のような専門家)はわかってくれるかも
 しれない。だが、「一般の人」(03行)である母
 親は、「わからへん(わからない)」だろうと言う
 のである。

この部分のやりとりに、B少年の関心を見て取
 ることができる。その一つの現れは、抜粋3を中
 心とする臨床心理士の助言を「『やめたい』と『や
 める』の:その:(0.6)違って一般その一般の
 人はわかるんですかみたいな話ですよ:(笑)」
 (01-04行)と定式化していることだ。「やめたい」
 と「やめる」の2つの違いではなくて、この違い
 が「一般の人」がわかるかどうかに重点を置いて
 いる。この抜粋4は、1回目のフォローアップイ
 ンタビューで調査者が、このやりとりを話題と
 し、どう受けとめたかをB少年にたずねている場
 面だが、その最初の部分でこの話題をわざわざこ
 のように再定式化しているという点が特徴的であ
 る。

もう一つの特徴が、この部分が笑い声での発話
 であり、その後B少年が笑い出している点であ
 る。「ほんならわからへんと思うみた(h)いな:」
 (06-07行)という次の順番での発話も笑い声でな
 されている。解決策として提示された、「やめれ
 る」宣言を代替する「やめたい」宣言だが、その
 聞き手である「一般の人」とくに母親にわかって
 もらえないのであれば意味がない。この笑いはそ
 のような評価を反映しているものと聞くことがで
 きる。B少年は、少年院出院後は、母親と同居す
 る予定であった。薬物をやめるためには母親の助
 けが必要である。「こうゆうふうにして欲しい」
 (25-26行)と伝えたいことがあるのだが、母親の
 側は「やめる」宣言を求めている。B少年は「や
 めたい」宣言ならできるが、「やめられる自信な
 んてない」(21-22行)。「なんですかね:」(29行)
 と途方にくってしまう様子である。

臨床心理士の助言は、プログラム終了後約半年
 の少年院生活でゆっくりと具体化に向けて消化さ
 れることになった。その過程で、修正が加えられ
 ている。たとえば、「やめれる」ではなくて、「や
 める」となっていく。だが、「やめたい」宣言よ
 りも強力に聞こえるものであり、このような決意
 に至ったところにこそプログラムの効果とB少年
 の努力の成果を見ることができよう。

3 回顧的自己評定の変化:ある断薬意志 確立の物語

前節においては、録画データを元に助言場面を
 検討した。「やめる」と言えないという悩みを抱
 えているB少年にたいして、臨床心理士は「やめ
 たい」と言うことを助言した。この助言はB少年
 の悩みにたいする有効な解決策と思われた。しか
 し実際には、「やめたい」助言があったプログラ
 ム最終週のあとにB少年の気持ちは落ち込んだ。

本節では、振り返りに基づく自己評定データを元に、少年院在院中の気持ちの変化を概観する。

3-1 グラフに見る「気持ち」

われわれは、少年院を出院する直前に行ったインタビューにおいて、B少年に少年院生活を振り返ってもらった。そのときに、「薬物から離脱することに向けた自分の気持ち（意欲、自信、希望、不安…）の変化」をグラフで表現してもらった。図1がそれである⁴⁾。

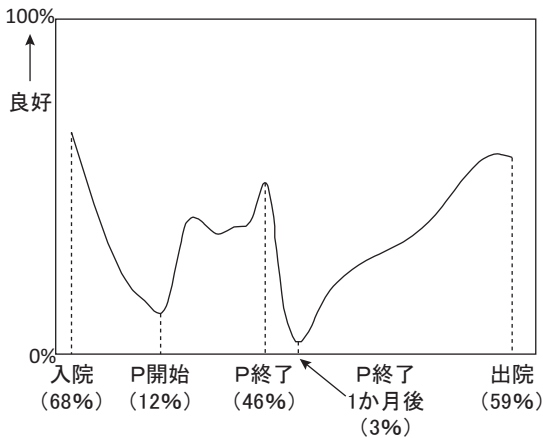


図1 「薬物に関する気持ち」の自己評定

表2 「薬物に関する気持ち」の変化

	時期	%
入院時	4月ごろ	68
プログラム開始時	6月下旬	12
プログラム終了時	9月下旬	46
プログラム終了1か月後	10月	3
出院前	3月中旬	59

グラフの縦の長さを100パーセントとすると、主要な時点での比率(%)は表2となる。数値が大きいほど「気持ち」は良好で前向きであることを示す。グラフとこれらの数値を元に、少年院在院期間を4期に分ける。プログラム期間を中心にその前と後とに分けられる。そして、プログラム終了から出院までに大きな落ち込みがあるので、これを2つに分けるという形にした(表3)。

図1のグラフは、約1年間にわたる期間についてのものである。ある時点で記憶に基づいて振り返りが行われ、作成された。なぜ、このようなグラフとなったのか。その理由をグラフ作成直後に同じインタビューでたずねている。本節では以下、4つの期間それぞれにおける薬物に「関する気持ち」の特徴に照準してみていく。断薬意志ややめる自信といったあるひとつの側面が一貫して問題となっているわけではないということが明らかとなる。

3-2 1期：「やめられた」から「やりたい」へ

B少年は、4月ごろにX女子少年院に入った。1期は、入院から約3か月後のプログラム開始までである。「やりたい」という欲求が焦点となっている。自己評定グラフ(図1)によると、薬物に関する気持ちは一貫して下がっている。その底にあたるプログラム開始週の発言(抜粋5)にあるように、やりたいという気持ちがつねに「24時間」ある。抜粋5は、抜粋1の続きを含めた部

表3 自己評定にもとづく4期区分

1期	「やめられた」から「やりたい」へ	入院からプログラム開始	4月から6月下旬
2期	「やめなあかん」し「やめられるかも」	プログラム期間中	6月下旬から9月下旬
3期	「やめたい」けど「やめられへん」かも	プログラム終了直後	10月
4期	「今日一日」「やめる」	出院にかけて	11月から翌年3月

分である。

抜粋5 やりたいて 24 時間思ってる

(グループワーク1 [1:22:32-1:22:48])

B: °なんか (0.2) え:と:<1 番 10 パーセン
トぐらいです。 > (0.6) () () やめたい (0.2)
気持ち:° (0.4) やりたいて (0.2) って:24
時間 (0.4) なんかよう思ってる:夢にも見る
し:. .

薬物への欲求は渴望 (craving) と呼ばれる (Gorski 1990=2006)。B少年の渴望感は強く、薬物を使うとまた刑務所に行くことになるかもしれないと考えるものの、「やりたいて」という欲求はとめられない。20代を「無駄にしてもいいって思える」くらいである。また、周囲のひとを不幸にするからと自分に言い聞かせても、大切なひとのためであっても、それが家族や恋人、友だちのためであってもやめる「活力」とはならないとB少年は続く部分で述べる (抜粋付1)。

それでは、入院当初の評定が高いのはなぜだろうか。グラフを描いた直後の同じインタビューで、B少年は「やめれたことがうれしい」という説明を提示する (抜粋6)。覚せい剤を再使用しだして、逮捕されたころには「自分の体が壊れて」「捕まりたい」とB少年は思っていた。それは、自力ではどうしてもやめられなかったからだ。これこそが依存の恐ろしさであり、逮捕されてホッとしたという感想を持つ薬物依存者は少なくない。

薬物依存からの離脱者のためのリハビリテーション施設ダルク (DARC) の創始者である近藤恒夫もそのひとりである。覚せい剤使用で逮捕された法廷で、やめられないから実刑にしてほしいと最終陳述で裁判官に訴えたという (近藤 2009:

48)。ダルクは2015年に創設30周年を迎え、2015年10月に30周年記念フォーラムが開催された。当時の奥田保裁判官が祝辞を述べたが、そのなかでもこのときのことが披露された (奥田 2015: 22)。

抜粋6 「やめれたことがうれしい」⁵⁾

(インタビューF6 [19:29-20:43])

R:それぞれじゃあ:ちょっと聞いていきたいんですけど:. 最初結構高いじゃないですかこれ (h) 今より高い (h) (h) (h)

B: (笑)

R:これなんでこんな高かったんですか。
(1.0)

B:そんなときは:ステージ2やったんですよ。やめれたことがうれしいとか。あんだけつらかったってゆうその薬物によって:自分の体が壊れた記憶がまだ >残ってるから:< (0.4) もう壊れて:その:最終ってもう捕まりたい:とか:いつになったら捕まんのやろとかもう↑:動かれへんし:いつも命の心配をして:い.hh 歩くたびにどっかの血管破裂するしみたいな:もうすごい状態やったから:(0.8) やめたいやめたい>やめたいやめたい < っってずっと思ってる:(.) その記憶がまだ:(.) その新しいんですよ (0.4) 自分の中で。

R:なるほど。

B:だから:その:鑑別所の中でも >やめれたことがうれしいこれからやめていこう < っっていう気持ちで:い.hh じゃあ少年院には-なりました=あ:少年院でよかった=今帰ってたらまたやってしまったやろなって (0.2) (こうち) 少年院かえ-行って .hh:絶対やめるんやもっかい笑えるようになるんやっ (0.2)

て思ってたときやって
(0.4)

R:なるほどね

B:たんですね。そうやめれたことがうれしい。

R:つらい記憶が残ってるから

B:そう。

R:まだ鮮明だったから。

鑑別所から少年院送致となったことについても、「少年院でよかった」と感じているのは注目すべきである。そうではなくて、もしも社会へと「今帰ってたらまたやってしまったやろな」と思われるからである。

そういうわけで、少年院に入院したときのB少年は「めっちゃ前向き」だった。薬物をわりと簡単にやめれると考えていた。「からだは依存」していても「心は依存」していないと思っていた。約1年間の少年院生活でやめられると思っていたのだ(抜粋7)。

抜粋7 「からだは依存してるだけ」

(インタビューF6 [20:43-21:19])

B:薬物は:自分にとって自分の人生を破壊した
ものってゆうふうにしかな。(0.6) まだそんな
ときは思ってなかったんですね。

R:なるほど。

B:やし↑:いぞん:(0.2) してるっていうのを
まだ受け入れてなかったから:

R:んんんん
(0.8)

B:そうですね。だからあんまりこうくやめ::
れてるって思ってたし:自分の心が依存して
るっていうことを:に:ふたをしてたし:.hh
ちがうってからだは依存してるだけや:と
か:(0.2) って思ってた:

R:なるほど。なんでこれで(0.4) まあよかつ
たというか。

B:そうですね:

R:なるほどね。

B:めっちゃ前向きでした

R:あ:なるほど:

B:うふ(h)(笑)

「めっちゃ前向き」だったのが、少年院での生活が始まると「すごい落ちた」、渴望感(「むしわく」)が出て、「気分の浮き沈み」、「躁鬱がすごかった」。少年院の生活では規則など覚えることが多い。そのプレッシャーに加えて、薬物使用の後遺症で頭が働かない。その結果、「死んだほうがいい」というように「毎日死について考えて」いた(抜粋8)。

抜粋8 「むしわく」

(インタビューF6 [21:40-22:37])

B:なんか(.) むしわくっていうんですかね:
(笑)

R:はいはいはい。

B:あの(h)ほ(h)し(h)くなったりと
か:.hhあと:すごい気持ち的に薬物とかと
関係あったんか-わあるんでしょうけど:す
ごい落ちたんですよ:もう入ってすぐ:もう
やっぱつらかったから:生活とか。覚えなあ
かんし:でも頭働かへんし:って。

R:なるほど:

B:今みたいにちゃんとはっきりしてなかったか
ら>そのときまだ残ってて:<.hhだから覚え
んのも大変で:いつもなんか:デジャヴみ
たいな変な感じやって:.hhでそれでもうつ
らかったし:もう気分の浮き沈みとか躁鬱が
すごかったから:まだそんなときもけっこう後

遺症とか：病気とかも残ってて：(0.8) で：
もう日にひ：とか半日とかでもう躁鬱が変
わったりとかめっちゃテンションあがったり
めっちゃさがったりみたいな .hh

R：なるほど。不安定だったんですね。

B：すごかったんですよ：もうその影響で：
(0.4) もう：なんかこんなやったら死んだ
ら（.）ほうがいいみたいな>毎日もう死につ
いて考えてたんですよ<も↑：

R：ん：

このように、B少年の自己評定では少年院入院から気持ちはどんどん下がってプログラム開始を迎えることになった。注1で紹介した、回復段階の最初の1年間のハネムーン期から「壁」期のステージと時期的にも、状态的にも重なっていたということなのかもしれない。

3-3 2期：「やめられるかも」

2期の焦点はやめる自信である。プログラム期間中、B少年の自己評定は上がっていく。それは、薬物をやめる可能性（やめる自信）が感じられたからである。その要因は大きく2つあるが、どちらもプログラムに由来する。ひとつ目の要因は、プログラムを通じて得られた知識である。B少年は、依存のメカニズムを理解した。断薬にそれまで失敗してきたのがまさに依存症ゆえであるということも感じられた（抜粋9）。その対処法も教わり、やめられるかもしれないと感じられるようになった。

抜粋9 「ぜんぶ依存症のせいやった」

（インタビューF6 [26:37-27:37]）

B：（略）あとグループワークのジェーマップとか見たときに：(1.0) あわたしが知りたかった

んってこれやと思たんですよ：いままで：そ
ういう：あのう：薬物の授業とかも受けてき
たけどぜんぶこう耐性がどうか：だめぜつ
たい的な感じなんですよ：わたしにゆわれて
もみたいな（笑）¥もうぜつぽ：感をかんじる
んですよそんなことゆわれたら一生やめれま
せんとかゆわれたら¥.hhhで.hhでんも：
ジェーマップには：こう：なん-なんか依存
症とはどんな病気とかかってゆうのが書いて
あってあついままで自分を：こう責めてきた
ものとか：自分が悪いやつやからこんなこと
思ってしまうしてしまうんやって思ってきた
ことって.hhぜんぶ依存症のせいやったんや
な：とか依存症の症状やったんやなっていう
のんに気づいて：(0.6) .hh自分で>責めて
きたこととかまわりに責められてきたこと
くっていうのを：なんか許せた気がしたんで
すよ：

R：なるほど：

B：受けいれられたってゆうか（1.0）って思った
ときに：すごいラクになりました。

プログラムで導入されたリラブスプリベンションプログラムの効果がここに見られる。具体的には教材『J.MARPP』（「ジェイマープ」が正しいが、B少年は「ジェーマップ」と発音している）の教えとして捉えられている。それまでの薬物指導などでは、覚せい剤の怖さを強調して、「一生やめられません」という否定的な面ばかりが強調されていた。前回の少年院でB少年が受けたプログラムもそのようなものだった。だが、新しいプログラムでは依存症のメカニズムが詳しく解説されている。そのおかげで、「自分が悪いやつやから」、すなわち意志が弱いからやめられないとこれまで「自分を責めて」きた。それがそうではな

いと感じられるようになったのだ。

2つ目の要因は、仲間の受講生の存在である。このプログラムでは受講者5人が最後まで無事に終えた。そのなかで、「自分といっしょ」と感じたことが大きい。

抜粋10 「自分でひとりじゃない」

(インタビューF6 [26:20-26:37])

B: >なんか上がったのはミーティングしたりとかみんな(0.4)が(0.4)あ自分といっしょなんや: って=初めて: その経験者とかの生の声みたいなんを.hh聞いたときに:(0.6)ま自分でひとりじゃないんやな: とおもたのと:

抜粋10は、抜粋9の直前の部分である。プログラムでの「ミーティング」を通じて、自分と同じ薬物依存の少年たち(「みんな」)が、やめたいと思ひ、やめようとしていることがわかった。

同じように薬物依存に苦しんでいる仲間がもたらすサポートの形として、ここでは2つを指摘しておきたい。ひとつは、理解されるということだ。世間の多くのひとが、意志によって薬物はやめられると考えている。依存者の苦しみはそのような誤解、無理解によって助長されている。やめようとしてもなかなかやめることができないのが依存である。仲間の受講者とは理解しあうことができ、それがうれしいのだ⁶⁾。

仲間がもたらすサポートの形の2つ目は、薬物からの回復事例の提供である。ダルクという薬物依存からのリハビリテーション施設では、スタッフは薬物依存の「当事者」であり、「先ゆく仲間」である。回復の初期段階にあるダルク入寮者には、「経験者」であるスタッフの回復している姿にあこがれて回復の途につく者もいる(南 2015

b)。抜粋10でいう「経験者」は特定されていないが、プログラム中に講話に来た、ダルクのある女性スタッフのことと推測される。この女性は、覚せい剤依存だったがダルクを活用して、数年間のクリーン期間(薬物を使わない期間)を積み重ねることができた。B少年たちにとっては、ひとつのロールモデルを提示するというサポートの形の例である。

プログラム期間中、落ち込んだ気持ちが、小さな落ち込みはあるもののほぼ一貫して上昇したとB少年は自己評定した(図1)。上がっていった経緯についての説明をまとめると、依存症についての理解が進み、薬物依存で苦しんでいるのは自分だけではないと知り、回復しているひといるとわかったなど、プログラムを通じて得た知識や経験が挙げられていた。

3-4 3期:「やめる意味がわからん」

3期と4期とでは、やめる意味が問題とされた。やめるという断薬意志そのものではなくて、やめることの動機付けに関わる側面である。

B少年の自己評定は、プログラムが終了した直後に大きく落ち込んでいる。その理由として、B少年は、「やめる意味」がわからなくなったといふことを挙げる(抜粋11)。

抜粋11 「やめる意味がわからなくなっ」た

(インタビューF6 [32:25-32:48])

B: ここはもう:::(0.2) やめる意味がもうくわからなくなっちゃって: >ほんまにプログラム終わって:.hh それ希望とかも(0.8) 帰っていったじゃないですか。

R: 帰っていったじゃいましたね: え:(笑)

B: ほんで: 相変わらずおかささんとすれちがいのままやし:(0.4) ほんまに誰かのために

とか：そうゆう対象がなくなってしまったんですよ。

次項で論じるが、B少年は自分のためではなく、ひとのため、「誰かのため」に薬物をやめるという考えていた。プログラムを終了して、受講生のうちの2人が元の施設に帰っていった。帰った2人のうちの1人は依存薬物が覚せい剤で同じということもあり、B少年は強い親近感を抱いていた。その少年がプログラムを通じてやめる決意を固めていったのに刺激を受けていた。「やめる意味」の源泉のひとつであったのだが、それがなくなってしまった。

もうひとつの源泉であり、B少年にとってより大きなのが「おかあさん」である。「やめる」と言うように迫ってきているのが母親であり、そう宣言できないのがB少年にとって最大の悩みであることはすでに確認した。「おかあさんとはすれちがいのまま」であり、「だれかのために」薬物をやめるという「対象」であった2人がともに「なくなって」「やめる意味がわからなくなった」。

この時期の「薬物に関する気持ち」を図1のように大きな落ち込みとして表現した理由は、後の5-1で見るともうひとつある。それは、薬物について考える時間の大幅な減少である。プログラム期間中は「やめなあかんと思わせるような刺激」があったが、それがなくなってしまった。その結果、「やめるってゆうことに対して意識が薄くなってしまった」というのである。

3-5 4期：「自分を大事にして生きる」

その後の出院までは、「やめる意味」を見だし補強していく期間となる。「人のため」から「自分のため」への転換である（平井 2015）⁷⁾。

B少年は、「救いの船がやってきた」とこの時

期のことを表現する。プログラム終了直後、「やめる意味」がわからなくなっていた。そのときに、「(少年)鑑別所の技官先生」が面接に来た⁸⁾。「先生」にたいして母親への不満を「ぶつくさ」ぶちまけたところ、問題はB少年自身にあると指摘された（以下の抜粋12の「あなたが問題なんじゃないか」）。

抜粋12 「自分の問題なんや」

(インタビューF6 [36:19-37:19])

B：そんときに：(0.4) 親が手紙書いてくれんとか：生きててほしいってゆってくれ(へ)んから生きる：意味がわからんとかってぶつくさゆってたんですよ：(0.2) そしたら：そもそも：親にい-生きててほしいってゆわれないと：.hh生きていたいと思えないあなたが問題なんじゃないかって(h)：.hhhずばっといわれたんですよ(0.6) そういうことを：ま(.) たしかにそやなって思たんですよ(h). ほんまや：そんなことみんなゆってもらって生きてないよな：って(.) 思ったし：.hh こっから出ていってからも：定期的には：生きてていいよあなたは生きててほしいよなんてゆってくれる人が：いないと生きていけないって(.) おかしいじゃないですか(.) 無理じゃないですか：そんならわたしここ-ここ出たら生きていかれへんわと思ったんですよ：(1.0) ああそやな(.) 自分の問題なんやって=おかあさんの問題じゃないんやこれって思ったんですよ：落ちてる原因が(0.4) そんときに自分でなにか変えてみないとあかんと思って。

「生きてていいよ」、「生きててほしい」と「定期的に」母親から言われるということはたしかにあ

りえない。それが生きていくのに必要ということであれば、「ここ出たら生きていかれへん」とB少年は気づいた。「問題」は母親ではなく「自分」にあり、「自分でなにか変えてみないと」いけないということに思い至ったというのである。

B少年は、続く部分（抜粋13）で、「自分を大事にして生きる」という気持ちになったという。出院後の「将来への希望」が出てきて、「クスリをやめたい」という気持ちが「ちょっとずつ育て」きた。

抜粋13 「自分を大事にして生きる」
（インタビューF6 [38:19-39:52]）

B：自分を：大事にする気持ちとかも：ちょっとずつ出てきたんですよ：(0.2) こんなことしてみたいとか：(0.2) いままでは：どうせえへんねんからみたいな。そのう：：ここを出て：？から：どうせ：面倒くさくなってやらへんねやから：いま：>あんなんやりたいこんなんやりたいかと思っても：いっしょやんとかって思ってたんですよ。そんなんあの現実見るだけやってっと思っておさえてきたんですよ。でも：やりたいと思う気持ちとか：：そういう希望的な気持ちを：自分でも大事にしなあかんのちゃうかなって思って。で(.) そうゆうことをいっぱい考えたりとかあんなんしたいなこんなんしたいなってゆう気持ち

(.) も：大事にするようにしたんですよ。そしたら：なんか将来への希望とか：そういう気持ち：も出てきて：そしたら：.hh 将来へのき-希望を、持ったってゆうことが(0.8) ちょっとこう幸せになってみたいとか：クスリやめてみたいってゆう気持ちにもつながって行って：(0.4) だんだん：その：自分を大事にするってゆうことから：(0.4) 自分を大事にして生きるとか：将来幸せになるとか(1.0) ってゆう：(1.0) なかで：こう：(0.8) クスリやめたいっていう気持ちがちょっとずつ育て行って：そしたら：その：(0.8) あの：そういう(0.2) 考えたりすることとかも：おさえていこうってゆうふうに。

将来の生活で「してみたい」ことを考えるようになってきた。「やりたいと思う気持ち」、「そういう希望的な気持ち」から、「ちょっと幸せになってみたい」という希望が出てきて、「クスリやめたい」気持ちが「ちょっとずつ育て」きた。

分析的には、断薬にまつわる「気持ち」は、希望や意志、可能性、そして規範と分類することができる(表4)。B少年は自己評定の変化を説明するために、表4に見られるようなさまざまな表現を使った。それは、3-2以降の項タイトルに見てとることができる。そのときどきの状況を説明するために適していたということなのだろう。

表4 断薬にまつわる「気持ち」

気持ちの表現	概念的側面	焦点となった時期
やりたい・やりたくない	使用欲求	1期
やめたくない・やめたい	断薬希望	
やめる・やめない	断薬意志	3・4期
やめられる・やめられない	断薬可能性(やめる自信)	2期
やめないといけない	規範	

他方、「気持ち」のある側面が前景となり説明で使われるとしても、ほかの側面がまったく無関係というわけではない。たとえば、抜粋13の前半で出院後にやりたいことを考えるという話題がある。考えても「どうせやらへん」から考えないという論理を以前は採用していたと述べられているが、「どうせやらへん」理由は、クスリを「やめられな」くてという理由からだろうと推測される。つまり、断薬可能性の見込みがここに隠されている。このように、クスリに「関する気持ち」は複合的なものなのである⁹⁾。

以上、回顧的な自己評定の説明としてB少年が語った内容を見てきた。やめられずに使用してしまう苦しみから解放された喜び、それでも渴望感に悩まされる日々、そしてプログラムを受講して依存のメカニズムを理解し、やめられるかもしれないと感じ始めた。プログラムが終わると、共に断薬に向けて取り組んできた仲間の少年がいなくなり、やめねばならないというプレッシャーが反動のように薄れる。期待していた支援的な反応が母親から得られずに、やめる意味がわからなくなってしまう。だが、自分のためにやめるという意味づけをして、やめる意志を確立している。まさに、断薬意志確立の物語である。約1年間という短い期間のものではあるが、ひとつの「回復の自己物語」を構成するものと言えるだろう (Maruna 2001=2013)。

4 欲求のセルフモニタリング：回顧的自己評定とのギャップ

少年院出院の直前に、B少年は約1年にわたる少年院生活における「薬物に関する気持ち」の浮き沈みをグラフで表現した。3節では、その説明とともにこれを提示した。これらは、カバーする期間は短いものの、ひとつの「回復の自己物語」

を構成するものと位置づけられた。このような回顧に基づくデータは、B少年が少年院生活をどのようなものとして意味づけているか、今後意味づけていくかについての洞察の基盤となる貴重なものである。

他方、実際の生活においてはさまざまな場面で膨大なやりとりがあり、それを通じてB少年はいろいろな気づきや経験をしていた。2節で詳しく検討したもの(抜粋3)のように、70分ほどのグループワークのほんの40秒間においても意義深いやりとり、そして、気づきがあった。本節と次節においては、3節と同じく自己報告データを素材とする。だが、そのカバーする範囲は大きく異なる。3節で素材としたインタビューは1年間という少年院生活全般について引き出すことを主眼とするものであった。他方、4節のものは1週間、5節のものは約1か月間である。カバーする範囲の違いと、報告が対象としている現象の絞り込み度の違いとによって、クスリを「やめる」と言えるようになる経緯は、また異なる相貌を見せる。

4節では、薬物への欲求のセルフモニタリングデータを扱う。プログラムの一環として、「気分の浮き沈み」と「薬物を使いたくなくなったかどうか」を少年たちは毎日記録した。「使いたくなくなった」ときは「ばつ(×)」、「ちょっと使いたくなくなるとき」は「三角(△)」、そして、「そんなことは全然思わなかった」ときは「丸(○)」とカレンダーに記録した。各週の授業でのB少年の報告が表5である。

セルフモニタリングは、認知行動療法の源流にあたる認知療法の基本技法の一つである (Beck 1976=1990: 23)¹⁰⁾。内面状態である「気持ち」や薬物への欲求を自身で観察して、その結果を日記に記録し、授業で報告している。これは、自己報

告のひとつのかたちだ。報告されている対象にアクセスできるのは本人だけであり、それを記録や記憶に基づいて報告するという点で、インタビューでの回答と同じである。

丸の数を見ると、7週目の報告で初めて丸がついた。つまり、1週間7日間のうちの1日は薬物を使いたいと思わなかったというのである。その後、9週目には4つ丸がつき、最終の12週目では6日が丸というように、丸の数が増えている。ただし、丸とする基準は10週目に述べているように、B少年の場合は欲求があっても「がまんできる」程度というものだった。

図1に示された回顧的自己評定では、プログラム開始時には12パーセントまで落ち込んだ「気持ち」はプログラム終了時には46パーセントまで上昇している。ただし、単調増加したというわけではなく、途中で小さな落ち込みがある。表5

表5 B少年の欲求

2週	ばってんしかつかへんかった。
3週	三角が多い。
4週	下がり気味で、ばつやら刺したがっているのが多い。
5週	下がって単独で寝てた。しんどいと教官に泣きついたら、翌日から元気になった。
6週	(なし)
7週	初めて丸みたいなんがついた。やらんでもいいかなって思えた日があった。
夏休み	
8週	親からようやく手紙が届いたが、腹立つ内容だった。
9週	丸が今までで一番多く、4つついた。残りが三角だった。
10週	丸が4つで残りが三角だった。丸の基準は「がまんできる」という低いもの。
11週	丸が多い。戦えるときが増えた。
12週	寝ていたら強烈な欲求がきて1日だけばつで、残りは丸だった。

の4週目と5週目に「下がり気味」や「下がって」という表現があるように、気分がすぐれなかった。落ち込みはこの時期に当たるようだ。

基本的に、薬物への欲求の変化が図1の回顧的自己評定に反映されていると言える。全体的な渴望感の沈静が、「気持ち」の上昇につながっている。「薬物に関する気持ち」にはいろいろな側面があるわけだが、そのうちの、「やりたい」あるいは「やらんでもいい」という欲求がこの時期の気持ちを規定していたことがここに見られる。

5 断薬意志確立のメカニズム

本節では、フォローアップインタビューでの発言を元に、4期において断薬意志が確立されるまでを検討する。3-2以降で提示した断薬意志確立の物語も「インタビュー」によって引き出されたものである。インタビューでの発言は、発言者の意識や経験を反映している。「いまここ」の出来事に限定されるわけではなく、記憶内容を想起することで幅広いタイムスパンの現象を話題とすることができる。出院前の最後のフォローアップインタビューでは、約1年にわたる期間を回顧してもらったわけだが、それまでのフォローアップインタビューでは、前回インタビュー時からの約1か月間の変化が中心となる。それだけ、より「生起」時点に近い経験が引き出されていると考えることができる。

本節で検討するプログラム終了後のフォローアップインタビューからは、「やめる」と言える自分づくりのプロセスとメカニズムをより詳細に理解することができる。「気持ち」の自己評定(図1)では、4期にあたるこの期間は低いところから一貫して上昇するものとして示された。上昇を下支えする出来事がいくつか見られるものと期待される場所である。だが、実際には「やめる」

と言うための論理と、それを具体化する断薬ノートという手段とは、ともに、初回のフォローアップインタビューですでに語られていた。要するに、4期における変化は量的なものであり、質的には一貫していた。ある意味、「ターニングポイント」は過ぎていたということだ。

5-1 プログラム終了後の落ち込みと転回の芽

プログラム終了直後の3期に気分が大きく落ち込んだというB少年は、回顧的自已評定では、「やめる意味がわからなくなった」とその理由を説明した(3-4)。これにたいして、実際に落ち込んだ時期の直後にあたるフォローアップインタビュー1回目では、「やめなあかん雰囲気なくなる」という変化をその契機としていた(抜粋14)。

抜粋 14 「やめなあかん」雰囲気がなくなる (インタビューF1 [00:34-01:27])

B: なんなんですかね: この1か月ですか: ?

R: 1か月え:

B: っと: (1.0) もうプログラム終わってから:
すぐ: (1.2) なに? なんか: けっこう>落ち込んだんくですよ.

R: 終わっ(.)て.

B: はい. なんか (1.2) やめなあかんよな: み
たいな雰囲気みたいなも: 時間が: (0.8) な
くなるじゃないですか: °なんてゆう(んや
ろ)° や(.)ふ(h) 刺激がなくなるからやめ
なあかんと思わせるような刺激? が毎日あ
ったわけじゃないですか: (0.4) なんかやめる
ことについて考える時間みたいなんが. でも
>それがなくなったくことで: (1.4) まあや
めんでいいわってなったわけじゃないけど:

(0.6) なんかやめるってゆうことに対して:
意識が薄くなってしまって: :

R: おおおお

B: で: あと家族のこととかも: (略)

プログラムが終わって、それまでは「毎日あった」「やめなあかんと思わせるような刺激」がなくなった。それで「やめるってゆうことに対して」の「意識が薄くなった」¹¹⁾。

「やめる意味」がわからなくなったB少年は、すべてを「あきらめる」気持ちとなっていた。「絶対《少年院を》出たらクスリやるわ」と感じていた。その状況を救ってくれたのが、「すべてをあきらめることと、現実を見ること、は違うと思うよ」と言ってくれた個別担任教官である。プログラム終了直後の数週間に、実は大きな出来事がいくつも起こっていた。精神科医師との面接や教官からの助言である¹²⁾。そのなかで、自分のためにやめるという意味づけと、「今日一日」やめるという戦略とを採用する萌芽がすでに生まれていた(抜粋15)。

抜粋 15 「ありのままの自分」を受けいれる (インタビューF1 [07:15-08:44])

B: う: ん現実を見るってゆうのはじゃあどうゆうことかなって考えたら: (0.8) ん: いま: 自信がない自分も: 事実で: でもやめたいって思う気持ちがあるのも: 事実で: (1.0) その: やめたいって思うのが(.) その-なんやろ(1.6) やめたいって思ってるのにやめられへんから: つらくなるわけじゃないですか. まそうゆうところから自分はやめたいって思ってる: その.hh おかあさんに: 感動さしてあげたいかってゆうのんも: (0.8) を思えるようになりたいってゆうのもやめれるよう-

やめれるってゆえるあたしになりたいって
 思ってるから：それができなくてつらくなっ
 てるわけじゃないですか。だから自分はべつ
 に：ほんまにやめる気がない。わけではない
 んやなってゆうのんとか考えて：ありのまま
 の自分？（。）を：受けいれた上で：(1.0)こ
 れから：(0.8)う：ん長い目で見るとじゃな
 くて：(1.0) 出院したその日はたぶんクスリ
 やらないと思うんですよあたし：たぶんその
 次の日もしないとと思うんですよ：それはゆえ
 るんですよた（h）ぶん(笑)だから：その日
 を：(0.6) 続けていけばいいわけじゃないで
 すが

R：なるほど。ん。

B：ま：ゆっちゃえば。

R：今日一日ってやつだね。

B：そう。それで：そう考えたら気が楽になっ
 ちますよすごく。

担任教官のことにしたがって、自分のクスリに
 対する気持ちをB少年は掘り下げた。「やめられ
 へん」と思っているから「つらく」なっている。
 だから「やめれる」と言えない。だが、「ほんま
 にやめる気がない」わけではない。「やめたいっ
 て思ってる」のだ。

やめたいという意欲、やめられないだろうとい
 う見込み、だからやめると言えない。これは、B
 少年がずっとかかえてきた問題だ。だが、ここ
 で「ありのままの自分を受けいれた」ところ、こ
 の隘路から突破する糸口が見えた。「出院したそ
 の日」クスリをやらないだろうという気づきで
 ある。これを「続けていけばいい」と考えるよう
 になったというのである。

調査者(R)が指摘しているように、これは「今
 日一日」という有名なスローガンの考えである¹³⁾。

このような戦略がすでにこの時点で語られてい
 ることは重要だ。「やめたい」と言えば良いとい
 う臨床心理士からの助言があったのは、この助言の
 1か月まえである。「やめたい」と「やめれる」
 の区別は「一般」の人である、母親にはわからな
 いだろうとそのときは却下したものだ。

だがそれから1か月の時点で、「ありのままの
 自分を受け入れる」という担任教官の助言を元
 に、「クスリやらない」日を積み重ねるという考
 えを表明している。教えを取り入れていくという
 方向性がすでに見えていたということだ。

5-2 断薬ノート

断薬は、「意志の力」、決意だけで実現できるも
 のではないということは、2回目の少年院入院と
 なったB少年には身にしみてわかっている。その
 具体的な方策がたいせつである。プログラムで、
 受講少年たちは順番に「わたしの再発・再使用の
 サイクルとその対処」（一例として、松本；今村
 2015: 150を参照）を発表した。B少年はその最
 後となる11週目のグループワークで発表した。
 そのときに、B少年は「断薬ノート」を作るとい
 うアイデアを披露した。

薬物をやめるための具体策として、断薬ノート
 づくりのほかに、B少年は興味深い工夫を考えて
 いた。これらは、「でもね、Bちゃん」運動と「だ
 から、なに」運動というものであり、5-4で詳
 述する。一方、断薬ノートづくりは、プログラム
 期間中から始まっており、1回目のフォローアッ
 プインタビューにおいても、断薬ノートづくりを
 進めていることをB少年は話した。

抜粋 16 断薬ノートの内容リストアップ

(インタビューF1 [29:31-30:04])

B：断薬ノートに書くことってゆうのをそのリス

トアップしてるんですよ。自分の今のグループワークのノートに。なんかたとえば：え：と：(0.2) クスリをして：困ったことのリストとか。つと：こんな幻覚が怖かっただからこれこれができなくなったっていうものとか：を書いていくとか。なんか：あの：：0.2グラム1万円で買えるんですけど：：その1万円があったらなにになにができるぞっていうコーナーとか(笑)

R：なるほど(笑)

断薬ノートは、いつも手元に持っていて、薬物使用の欲求が出たときに参照するものだ。だが、少年院にいるうちから作ることはできない。プライバシー保護や保安上の理由から、少年院の中から持ち出だすことができるものはほんとうに限られているからだ。それで、出院後すぐにノートを購入することにB少年は決めている。そこに書く内容をいまから「リストアップしている」のである。

「書くこと」のひとつは、「クスリをして困ったこと」である。たとえば、「こんな幻覚が怖かった」というようなことだ。もうひとつは、薬物の購入代金で代わりにできることだ。たとえば、ネイルサロンに行けるといったことが述べられた。

断薬ノートづくりはこの後も続けられた。たとえば、11月の2回目のフォローアップインタビューでは、家族からのメッセージを書いてもらうページやプリクラ（写真シール機で撮影した写真）を貼るページというアイデアが語られた。

プログラムのフォローアップとしては、出院後の生活のスケジュール表づくりというものがプログラムの一環として行われた。プログラム中にも「スケジュール表」として、起床から就寝までのスケジュールづくりがなされた。出院に備えて、それを繰り返し修正していくということが行われ

ていた¹⁴⁾。スケジュールづくりと断薬ノートづくりとが、B少年にとってのやめるための具体策となった。

5-3 自分史作成を通じての気づき

自分のためにやめるという方針と、「今日一日」やめるという戦略、そして、断薬ノートづくりという3つは、B少年が「やめる」と言えるようになっていくための3つの柱であった。それが、すでにプログラム終了後1か月の時点で述べられていることを確認した。それから1か月後の2回目のフォローアップインタビューでは、前回のインタビューが自分史づくりのために集中的に内省を行っていた最中のものであったという事情が明かされた。

自分史作成のための内省を通じてB少年が気づいたことには、大きく2つがあった。「クスリによって自分の人生が崩れていった」ことと、「親と無理して仲良くならなあかん」と思わなくてもいいだろうということだ。

抜粋 17 「クスリによって自分の人生が崩れていった」

(インタビューF 2 [03:52-05:21])

B：だから：自分史書いたことで：自分が：(0.6) こういかに：こうクスリによって：自分の人生が：：(.) 崩れていったかとかが：：(.) まあ明らかになったんですよ＝今まで忘れてたことも：：.hh こう順を追って書いていったら：：.hh 自分は：：なんかもう心が腐って>自分からクスリが欲しいって思ってるのやってみたいなふうに思ってる：：<. =もう自分のあくまがそれを思わせてるのかどうかなんてもうあたしにはわからないんですよ。もうあたしが思ってるもんとしかやっぱ思えないか

ら. .hhでも:(0.4) そやって文章にしていくことで:(0.6) あっ(0.2) なんか:その覚せい剤をしたことによって:壊れていってる. ふんでしてるあいだにも:(0.8) やめたくてやめたくてしかたなかった自分の気持ちとか:(つばを飲みこむ)どうしてこんなに:全部生活も苦しくなって:.hh お金全部使ってしまったて:もう明日に15万必要な(h) じょう(h) きょう(h) でもあたしはなんぼでもクスリにお金をつっこんでたんですよ =もう誰のお金とかももうかまわず. .hhで(0.2) もうなんにもかも無くなっていて:自分でその助けてっていいたいけど:.hh <-警察につながるんじゃないとかって考えたら:なんのこ-話もし-できなくなったんですよ. もう全然関係ない話とかでももしかしたらクスリのこと(0.4)を:こうばれるんじゃないかって勘ぐって:.hh もうなんにも話ができなくなって=余計に辛くてもうなんか.hh すごい辛かったんですよ.

自分史を書くことで、「いかに」「クスリによって自分の人生が崩れていったか」がB少年には明らかになった。「お金を全部」「クスリにお金をつっこんでた」ということを思いだした。そのような悲惨な状況を思いだすとともに、それがまさに依存であるということも意識されている。「自分の悪魔がそれを思わせる」という表現だが、「悪魔」はグループワークで使用したテキストの『J.MARPP』において、依存症の説明として使われているものだ¹⁵⁾。

B少年にとって、母親との関係改善は少年院入院まえからの課題であった。覚せい剤使用を母親が警察に通報したために、以前逮捕されたことがある。今回の再使用と少年院再入院にあたって

は、やめると誓ったのにその約束を破り、信頼を裏切ったと母親から非難された。出院後、万一覚せい剤を再使用したときには、母親にはいっしょにダルクに行ってもらいたいとB少年は考えている。だが、母親からは「なんでやめるって言われへんの」とB少年は責められ続けている。臨床心理士が「やめれる」ではなくて「やめたい」と言うことを助言したのは、このようなB少年の悩みへの対策としてであった。

「やめれる」と「やめたい」の区別が「一般の人」(抜粋4)つまり、母親には受け入れられるものではないというのがB少年の見込みだった。そして、母親が「生きていてほしい」と言ってくれないという悩みを精神科医に打ち明けて、そんなことを求めていたら生きていけないと諭されたというのは前回のフォローアップインタビューで報告された。

B少年は「自分のために」やめるという意味づけにたどりついたわけだが、2回目のフォローアップインタビューでは、母親との関係改善を無理にすることはないという心境が語られた(抜粋18)。

抜粋 18 「親が悪いけど、親が原因ではない」
(インタビューF2 [13:44-15:32])

B:あとう:自分史書い [て:(1.0) その:自分

R: [うん

B:がこうなってしまった原因とはな [にかみ

R: [うん

B:いな問題こうどう:[の原因とか問題行動は

R: [はいはいはい

B:なんだったかみたいなんを:その:書きおわったあとに書くんですよ=>またそういう作文を<. .hhhhで(.) それ:う:思ったらやっぱおや:(0.4) が [:

R : [うん
 B : (1.4) °う : ° : 悪いわと↑思っ [た (h)
 R : [あほんと
 B : ん (h) で (h) す.
 B : 親が悪いけ [ど : 親が原因ではないって思っ
 R : [う : ↑ : :
 B : たんですよね. 原因と悪いって多分 [hh
 R : [は :
 B : [イコールじゃないんじゃないかってゆう
 R : [: はいはいはいなるほど :
 B : ふうに考えて : .hh 親がわるいから : 悪いこと
 した > 悪いことしたってゆうかくまああた
 しに対して良くない行いをしたことであたし
 の心は .hh 傷ついてしまったことで : .hh わた
 し それを : どうにかして : 助けてって誰か
 にゆうとか : こうして欲しいってゆう行動を
 起こさずに不良になったら : こう .hh なん
 かいいってゆうふうな選択肢をわたしが選ん
 だことが原因で : (0.6) こうなっていったわけ
 じゃないですか : . だから : (0.4) 親が悪い
 けど : 原因はわたしにある. だからわたし :
が直す : ところがある (0.2) えっ直すところ
 はわたしに (0.4) もあるってゆうふう
 に考えて : だから : (1.0) 親が悪いでいいやん
 わたし : は : べつに親のせいにしたらあかん
 とか : .hh 親が悪いわけないだって親やもん
 とかそうゆうか (h) んが (h) えで別に
 い子ちゃんにいる必要はないんじゃないか
 ってゆうふうにもう自分にゆってあげて : そし
 たら : .hh (1.0) 別になんかこう無理して仲
 良くならなあかんとか : (0.6) すごいこう :
 わかり合わなあかんとか : わたしがそんなに
 無理して思わなくて¥いいんじゃないか (h)
 な (h) って : ¥.hh 思い始めたら : (0.6)
 ちょっとし : んどい (.) っていうかもう : :

無理するのがしんどくなって (.) もう忙しい
 し¥みたいな¥. (笑)

B少年は家族から虐待を受けていた. それを黙
 認していた「親」(母親)が「悪い」と自分史作
 成を通じて考えた. 自身の「不良」行動は「親が
 悪い」からである. だが, だからといって行為主
 体としての責任を否定するわけではない(「あた
 しに直すところがある」).

このような責任論とは関係なくやや唐突に, 母
 親との関係改善は必須ではないという気づきが語
 られている(「無理して仲良くならなあかんとか」
 「無理して思わなくていい」). これは, 「親のため
 に」やめるから, 「自分のために」やめるという
 意味づけへの転換の一部となるものである.

インタビューデータの特徴として, ひとつ注意
 しておきたい. それは, 聞き手が知らないことは,
 話し手が自発的に話題としないかぎり聞けないと
 いうことだ. 本項で取り上げた内容は, すでに前
 回のフォローアップインタビュー中におそらくB
 少年は考えていたことだ. だが, 自分史作成のため
 の内省期間中であるということも, そこで考え
 たことも語られることはなかった. 1か月後にな
 って, どちらもB少年の口から語られることと
 なった. 内省期間中に考えはじめたことが, ま
 とまって語れるようになるまでに時間がかかった
 という事情が感じられる.

5-4 やめようと普通に思う

プログラム終了後3か月となる3回目のフォ
 ローアップインタビューでは, B少年は薬物をや
 めようと「普通に思」えるようになっていた.

抜粋19 悪魔と「いっしょに生きていこう」

(インタビューF3 [29:30-30:47])

R: その:(0.4) <やめる気>はじゃあその:前は芽生えてきたみたいにゆってたけど:今はそのある程度自信が出来たから?

B: そう:(.) ですね. もうなんか:今はやめよって普通に思います. やめていこうって思うし:(0.4) やりたいって気持ちもやめたいって気持ちも:両方あって:. やりたいっていう気持ちは:(1.0) う:::ん(0.4) 覚せい剤の:(0.8) その:依存の:依存症の症状として:あるんやなっていう認識になった=自分がやりたいって思ってるんじゃないか:とかっていうて悩んでたけど:(.) そうじゃなくて:えそう>自分がやりたいって思うことには変わりないけど:<脳の中に悪魔が住みついてるみたい:あったじゃないですか:(.) ほんまにそんな感じていう認識に変わったっていうか:(.) <そういう自分が:自分のなかにはおる>っていうのを:ちゃんと受け入れられることが出来たから:(0.4) そうじゃない自分を見つけてから?(0.4) だから:あ:いっしょに:(1.0) 生きて行こうって.

R: ほ:::(.) 悪魔と.

B: そう(笑)

R: うまくつきあっていこうと.

B: そうですね. (笑)

「普通に」という表現が鍵である。無理をすることもなく、「普通に」やめようと思っている。やりたいという欲求が出ると、やめる自信があやうく感じられる。だが、それは「自分がやりたい」と思うのではなく、「脳の中に悪魔が住みついてる」ためだという依存症理解で対応していこう

としている。

「普通に」と言う根拠としては、「自分の根底にはやっぱりやめたいって自分がおる」という気づきがある。そして、この気づきは、自分史作成のなかで得られたものであると、この日のインタビューの最初のほうのところで述べられた。

調査者からの「自信が出来たから」であるのかという質問にたいして、「そうですね」とB少年が肯定的に回答していることも注目すべき点である。「やめる自信」が「5パーセント」と小声で自信なさそうに発言していたプログラム初日(抜粋1)とは好対照をなすものである。

この日のインタビューの最初のトピックは、「この1か月半ぐらい、いろいろあって、自分のことについていろいろと考えた」というものだった。そして、これまでは「周りが基準」だったことに気づいて、「普通の自分」の姿を考え直した。その結果として、「自分の根底にはやっぱりやめたいってゆう自分がおる」と気づいたというのである。

そして、懸案だった母親との関係については、「今のままでいいわって思えるようになりました」との発言があった。母親基準で母親のために「やめる」から、自分のために「生きる」、そのために「やめる」という意味づけへの転換がついに成し遂げられたということになる。

プログラム終了後の3か月のあいだに、精神科医との面接、個別担任教官からはたらきかけ、自分史作成などと考えを深める機会があった。また、本論で詳述することはできないが、成績に「d」がついたということもあった¹⁶⁾。約1か月間隔での30分前後のインタビューでは、B少年が自発的に持ち出す話題に関する自己報告が頼りであり、その体系性などには不十分なところがある。話された内容がデータのほぼすべてとなるわ

けだが、その制約のなかで断薬意志確立につながった経緯を描き出してきただけになる。

この日のインタビューでは、断薬の具体策として、断薬ノートとは別のものが語られた。それは、「でもね、Bちゃん」運動というものだ。「クスリとかしたくなる」ときに、「でもね、Bちゃん」と自分に呼びかける。そして、「あんどきクスリ一回やってしまったら：その一回で：もう欲求がおさまらへんくなって：結局また2回目もしてしまつて3回目もしてしまつて：結局ぼろぼろになつて歯もなんかぼろぼろになつて、もう体中ほんまに痛かつたし、もうしんどかつたよねっていうんですよ、自分に」というものである。これを毎日自分に言い聞かせるということをしてきた。すると、「常に、薬物にはこういう悪いところがあるっていうのが、頭の中に残るようになった」というのである。

もうひとつ「だから、なに」運動というのも考えていた。これは、アンガーマネジメントの応用と考えられる。他人の怒りに接したときに、怒りの原因はそのひとにあつて自分にはないのだということ、自分に言い聞かせるようにした。これは、周囲に気を遣いすぎているそれまでの生き方を、自分基準へと変更するための方策であつた。

5-5 気分の落ち込みを自力で処理

プログラム終了後4か月となる4回目のフォローアップインタビューでは、気分が落ち込んで薬物への欲求が強まったが、自力で対処できたというエピソードがB少年から語られた。2つの点をここでは取り上げることにしたい。ひとつは、自力で対処したということ、そして、もうひとつは、出院後の練習と位置づけているという点である。後者の点から見ていく。

気分が落ち込んだ原因ははっきりとはしない

が、少年院の寮生活においてほかの少年との人間関係がそのひとつではないかとB少年は考えていた。原因はともあれ、気分が落ち込むということは出院後の社会生活においても起こりうるのだ。そのために、気分が落ち込んで薬物への欲求が出てきたときの対処法は、少年院在院中から練習しておくべきことである。

抜粋 20 「こうゆう時期もあるって」

(インタビューF 4 [04:45-05:08])

B：そうです。落ちたのは落ちたんですけど、(0.6) .hh 落ち方が：(0.4) °なんやろう°前みたいにも：「クスリ(.)したんねん」(0.2) みたいな：じゃなくって：したいって思うし：>そのしたいってゆう気持ちやっぱ不安定になればなるほどおさえられなくなるのは事実やけど：<それを：<こうゆう時期もあるってゆうふうな：>現実として：こ：とらえるってゆうか：

気分が落ち込んで、「気持ちが不安定にな」つた。「クスリしたんねん」と欲求が「おさえられなくなる」というのは以前と同じだった。だが、「こうゆう時期もある」ととらえたことが、今回は違つていたとB少年は述べている(抜粋20)。すこし冷静さが感じられる対応となつている。

続いて、欲求への対処として、いろいろなことを試したとB少年は述べる。絵を描いたり、本を読んだり、メモに気持ちを整理したりしている。とくに、根底の原因と思われる寮生にたいする怒りという感情を分析しているのは特筆すべき点である(抜粋21)。

抜粋 21 「自分で整理した」

(インタビュー F 4 [06:34-07:12])

B: (略) > 自分でどうにか処理してみようって思ったりとか: 誰かに助けを求めてみよ: っ
て思ったり: < なんか絵: 描いたり: 本を読んだり: なんか: メモとかに: なんやろう整理して: (0.4) 自分の気持ちを? なんかどれなにが原因でこうゆうふう¹に思ってるのかとか: (0.4) ↑ なんで怒ってるのかってゆうの
あ: そのアン-アンガーとかの: : .hh を: .
hh 生かして: なんで: こんなに気持ちがこ:
怒ってるのかイライラするんかってゆうなに
に対してお-なんかとかってゆうのも: なん
か自分で整理したりとかして:

R: ふ: ん

アンガーマネジメントは、プログラムの柱のひとつであった。自分の「怒り」の感情を冷静に分析して理解することで、衝動的な暴力行動などを回避することが期待されている。B少年は、その教えを生かして、薬物欲求につながった怒りを「自分で整理」することができたという。これは、リラブスプリベンションにアンガーマネジメントを加えているというプログラムの効果のひとつのあたりと位置づけられよう。

自分のためにやめるといふ気持ちの根底には、自分への信頼と自信が必要である。自己肯定感や自尊心と呼ばれるようなものである。少年院生活のなかの活動を通じて、「劣等感」を払拭し、「けっこうあたしでできるやん」という自信を積み重ねていることもうかがえた(抜粋 22)。

抜粋 22 「けっこうあたしでできるやん」

(インタビュー F 4 [17:47-20:08])

R: .hh もうひとつね: 今の話と多分関連すると

思うんですけど: . その .hh 昔は: その人のため: とか誰かのため気をつけてっていう風な自分だったけど: その .hh 自分のためにあ: の: 生きていこうっていう風に考えられるようになったっていつきの: .hh その: 昔の: 姿は想像できるんですよ (0.4) 気を使っちゃってとか誰かのためにね (.) あ: の: .hh う: クスリをやめるとか: まあそういう風な考えかた: 想像つくんだけど: .hh 自分のため: っていうのは: もうちょっと具体的にってゆうとどういう: 考え方なん-なり生き方なんだろうっていつのは .hh ぜひ聞いてみたいなと思ってたんですけど。

B: う: : : ん (.) クスリをやめ (て) たことで: (0.8) ここで手にいれたもの: ? 笑えるようになったとか: 感情とかとりも-ら-感情がとり戻ってきたとか: こ: : : まともにしゃべれるようになったとか: (0.6) なんか: こ: Bさんの笑顔って: みたいなことゆわれたりとかしたら: それってわたし自身のものじゃないですか: .

R: は: いはいはい
(1.0)

B: とかなんかそうゆう (0.4) ここで: (咳払い) 美術やったりとか体育やったり: いろんな授業: とかを通して (.) こう .hh 結構あたしでできるやんみたいな (h) ってときあるじゃないですか: . でほめられたりとかしたときに: (0.4) あっ自分でこういう才能とか: (1.0) できること: ? でもとも結構ひ-人並-並より上ぐらいになんでもできる人やったんですよ。器用やったりとかして: . > だからくそういうところが: ぜんぶクスリでなくなってしまつて: すごい (0.4) 劣等感感じてた自分ていうか: そういつの思い出したら: いま:

色んなことができて：みんなにすごいねって
ゆわれたりとか：する自分とか（.）上手にな
んでもできるって .hh 思える自分っていうの
を：(0.4) なくしたくないっていう気持ち？
(0.8) とか (0.2) が：(0.4) う：：ん (0.2)
自分のためにクスリを（.）これをした-これ
をなくしてしまうと思うと：(0.6) やっぱり
(0.2) う：：ん（.）やめなあかん
[と思いますね：.

R：[なるほどね.

プログラム終了後4か月が経過して、B少年は
1級上生となった。少年院の教育課程の最後の段
階である。出院もいよいよ目前に迫ってきた。薬
物欲求に自力で対応するというのは、そのような
出院後の生活を見据えてのB少年の決意が反映さ
れた取り組みであった。

5-6 「今日一日」は塀のマジックでは ない

プログラム終了5か月後の5回目フォローア
ップインタビューは、いよいよ出院が近いと感じら
れているなかでのものだった。B少年は出院に向
けての準備がほぼ整ったようで落ち着いているよ
うだった。

インタビューにおいて、最上級生としてほかの
寮生への対応がうまくできている、それが成長し
たところだとB少年が述べた。そこで、前回の少
年院のときも最上級生という時期があったであろ
うが、そのときにはそのような対応はしなかった
のかという趣旨の質問を調査者が投げかけた。す
ると、前回は「模範生を演じて」いたという回答
があった（抜粋23）。

抜粋 23 まえは模範生を演じていた

（インタビューF5 [08:43-08:57]）

B：ほんで：なんか（huhu）.hh すごい模範生
（0.4）しかも演じてたんですよ：.

R：はいはい

B：模範生であることを.

R：はいはい。なるほどね：

B：そう。それが自分でもそれ：なりきってるの
がラクやったから：

R：はいはいはい.

B：そうそう（0.6）演じきってて：最後まで.

模範生に「なりきってんのがラクやった」とB少
年は言う。そして、「最後まで」「演じきって」出
院したということである。

B少年によると、それが「失敗した」。「社会に
出たら」「演じきるのが」「もたんかっ」た。それ
で、作戦変更というわけではないが、今回は方針
を変えたというのである（抜粋24）。

抜粋 24 賢くなっているが伝わらない

（インタビューF5 [09:32-10:15]）

B：>でそれで失敗したんですよけっきょくだか
らく（0.4）もたんかって.

R：はいはい.

B：演じきるのが（h）（0.6）社会に（h）出（h）
た（h）ら。（笑）

R：はいはい.

B：そう：<だから：>（0.6）今回は：（0.6）
ほんまの：じぶん：みたいなん（0.2）で：
こうやっていくうえ（0.4）で：こうなん
か .hh（0.6）そう：その「一生やめます」：と
かってゆうんじゃなくって：「今日一日」と
か：不安要素とかもいろいろ考えたり：.hh も
しやってしまったときのこととか：なんかそ

うゆうことも: しっかり考えて: .hhh やって
いく: : : ゝ (0.2) てゆう: 感じにしたいな
と思うんですけど>それがおかあさんに伝わ
らんのですよ: <ほ (h) (笑)

R: はいはいはい.

今度出院するにあたってB少年は、「一生やめます」と宣言するのではなく、「不安要素」を考えながら「今日一日」ずつやっ*て*いこうと考えている。これこそ、プログラムの「強くなるより賢くなれ」という教えの実践である。B少年としては準備万端と言いたいところなのだが、それが「おかあさんに伝わら」ない。苦笑するしかないというところだろうか。

出院準備万端のように思われるが、それでも調査者の目から見るといくつか気になるところがあった。そのうちのひとつが、アルコールにたいする認識である。プログラムのほかの受講少年と同じく、B少年にはかなりの飲酒歴があり、アルコールを提供する飲食店で働いていたこともある。また、出院後の職場としてそのような仕事も考えている。なにより気がかりなのは、アルコール摂取が危険という認識がB少年に弱いことだ。

薬物依存者のあいだでは、アルコール摂取も「再使用」とされている。『SMARPP』にも、「ある研究によれば、覚せい剤をやめていた人が、ふたたび覚せい剤に手を出してしまうきっかけの大半が、アルコールを飲んで『ほろ酔い』になっているときだといひます」(松本; 今村 2015: 63. 強調は原文)とある。このことは、プログラム中にB少年をはじめとする受講者たちにたいして強調された。だが、薬物はやめるけれども飲酒はやめないとほぼ全員が言い張った。B少年も同様であった。

もうひとつの危機状況として、異性からの薬物

使用の誘いがある。B少年の場合、最初の覚せい剤使用も、セックス時に男性側から持ちかけられたものであるだけに、その危険への意識をB少年は持っていた。

抜粋 25 ひとつの危機状況への対応

(インタビューF 5 [22:25-24:50])

R: いや(.)ま: そうゆうこと: の危険性もあるからその .hh 異性関係はちょっと: こうどうしようとかそうゆうことは考えてないですか? (0.2) 特に.

B: あ: でも: つきあった彼氏が: 普通やと思つてた: つきあった彼氏が: やっ- その: : つ: -覚せい剤してたつてゆうパターンはもうむちゃくちゃ: : 手に負えない状況やと思いま(h)す(h): =あたし(h): それが: .hh

R: ん: ん:

B: そのたとえばその: セックスしてて: 「これ知ってる?」つて出されるとするじゃないですか: =知ってるもなにもって感じじゃないですか(笑)で(h): そんなときとかに: それも考えてるんですよサイクルシートとかに:

R: はいはいはいはい

B: 書いてるんですけど: <これできるかな: >つて思う: のが: もうそれなんですよ: .たとえばその: 同性の友だちとかに: 「ちょ: えっこれ知ってる?とかやれへん?」とかつて>ゆわれたときは: <(0.6) たぶんなんかこう: それもきついで: 「今日はいいわ:」とか: なんか: もう「これからお酒飲む予定あるし」とかなんかゆったりとかして: なんが適当にカバーしたりとかするつてゆう: 手もあるけど: その最中とかに: 出さ(h)れ(h)てしま(h)つたら: .hhあたしとしてもこう、逃げようがないつてゆうか: . (1.0)

そうだからそのサイクルシートには：(0.6)
 あ：なんかこわいからとか：なんか：(0.6)
 う：こわいからってゆうとか：(0.4) あと：
 もう：(1.2) ん：それで断わってもう心をこ
 う無にして：いやま (0.2) 知りせんみたい
 な感じでゆったりとか：もうすきを見て逃げ
 るとか：(0.4) ダッシュ逃げて：どっかに
 駆け込むってゆうかそうダルクとかに：行っ
 たりとか：(0.8) そう病院とか：自分を守っ
 てくれるところに行くっていうように書いて
 いるんですけど (0.2) これ>できんのかよっ
 てく思うんですよ。そうだから：.hh ほんま
 に：ちゃんと選ばなあかん：ってゆうか普
 通の人と：出会ったらたいがいしてないはず
 なんですけど：.

R：はいはい

B：類は友を呼ぶってゆうか：.hh ふ (h) だか
 らあたし：のせいかつ：次第で：だから：
 (0.4) 寄ってくる男が：そうゆう>やつに
 なってくるわけじゃないですか：<. それは
 まずいな：って思いますね。はい。(笑)

R：なるほどね：

そのような状況となったときへの対応策を断薬
 ノートに書くという準備をB少年はしている。
 「すきを見て逃げる」とか、ダルクや病院といっ
 た「自分を守ってくれるところに行く」という対
 策である。ただ、実際の場面で「これできんのか
 よ」とB少年自身も思ってしまうような対策であ
 る。そもそも、パートナーを選ぶときに「ちゃんと
 選ばなあかん」と考えている。

本節では、プログラム終了後のフォローアップ
 インタビューを順に検討した。出院直前の回顧的
 自己評定によると、「薬物に関する気持ち」は大き
 く落ち込んだあとに一貫して上昇していた。

フォローアップインタビューから明らかになった
 のは、プログラム終了後1か月時点までに、「や
 める」断薬意志確立のための重要な出来事は起
 こっていたということである。プログラム終了後
 の受講者仲間との別れに伴う反動的な気分の落ち
 込みと、精神科医師や個別担任教官との面接を通
 じて、自分のために「今日一日」やめるという基
 本は見いだされていた。これがその後の約3か
 月のあいだに深化され強固なものとなっていた。

1か月ごとのインタビューでは、1年間を振り
 返っての回顧よりは細かな変化を聞き出すことは
 できた。だがそれでも、インタビュー時間の制約
 などもあり、経緯の詳細が特定しきれないものも
 あった。とはいうものの「単調な上昇」と表現さ
 れた期間についてのメカニズムの一端を解明する
 ことができた。

6 「やめる」と言える自分づくり

本節では、本論の要約を最初に行ったのちに、
 プログラムの成功例と位置づけられるB少年の特
 異性を指摘する。プログラム評価の際の留保点を
 整理するためである。最後に、学術的な含意を3
 点指摘して結びとする。

6-1 本論の要約

本論において、B少年が「やめる」と断薬意志
 を確立して出院にいたるまでの変遷を論じてき
 きた。入院3か月後のプログラム開始時点と、3か
 月にわたるプログラム終了後に気持ちは大きく落
 ち込んでいた。覚せい剤を「やめられてうれしい」
 から、「やりたい」、「やめられるかも」、「やめな
 あかん」、「やめたい」ので「今日一日やめる」と
 「薬物に関する気持ち」は変化していた。

2回目の少年院入院となったB少年は、前回出
 院時は「やめる」決意をかためていたのだが結局

再使用してしまい、今回入院当初はやめる自信をまったく失っていた。「やめる」宣言を求める母親の期待に応えるすべがない状態であった。臨床心理士の助言は一見このようなB少年の窮地を救うものと思われたが、「一般の人」であるB少年の母親には通用しないものだった。

プログラムを通じて、薬物依存のメカニズムを学び、ほかの受講少年たちに触発されて、B少年のやめる自信とやめる決意はしだいに改善していった。とくに、プログラム終了後の空虚感とその反動のなかで、鍵となる働きかけと気づきとがあった。「やめる」断薬意志はこの3か月ほどの期間で確立されたようだった。

残念ながら、一番理解してほしかった母親からは、望むような理解と支援を受けるまでに持っていくことはできなかった。それでも、「自分のために」やめるという意味づけにB少年は到達した。覚せい剤使用によって下がっていた自尊心も、依存メカニズムを理解するにつれて望まれる水準まで上昇した。

抜粋 26 依存症を勉強して自分を知った (インタビューF6 [46:15-47:53])

B: 依存症ってゆ↑う: 病気を勉強したことで:
自分を知ったってゆうか: 受け入れられるようになった: こと=さっきもちょっとゆったんですけど:(0.4) 今まで責めてきた (0.2) し:
否定してきたし: クスリをす:-するってゆうことは絶対あかんこと (0.2) ってゆう (0.2) まああかんことなんですけど: て思って-あ-する自分もあかんって思った. .hh(0.4) けど:
(0.6) 病気やってゆうこと (0.2) を受け入れたり:(1.5) 今まで-う-あったこととか失敗してきたこととか: いろんな>危機場面があったり自分の依存症的な行動とかってゆう

のは自分の性格が歪んでるからってゆうもんや<とってたものが: .hh 全部当てはまってたんですよ=全部ジェーマップに答えがのってたんですよ. こういうことします=あ: したしたこれしたしたみたいな《笑》あ: こうゆうことやったんや: っていうの: んがもう全部当てはまって: hh あ: あたしこう (0.2) ゆうことやったんやってゆうのを知ったことっていうのもすごく大きかったし: だから: (0.8) それを: でもやめていってゆう方法があるわけじゃないですか. あ自分で: (0.4) 幸せになっていいんやなって (0.4) なれるんやなって思えるようになったこと↑:

R: なるほど. ふ: ん. それもよくわかりますね.
B: そう. 見えない敵やったんですよ. (1.0) けどそれが見えるようになってきたってゆう (1.2) 感じですね.

長いフォローアップ最終回インタビューの終わり近く、3か月のプログラムの効果についてたずねたところ、B少年は抜粋26のように回答した。一言で言うと、「見えない敵」であった薬物依存が「見えるようになってきた」ということである。そして、依存症で曇らされていた自己理解が進んだ（「あ、あたしこういうことやったんや」）。自尊心の落ち込みも母親との関係悪化も、この気づきを元に修復したり対応策を工夫したりすることができた。B少年は、プログラム受講者としてその最大限の恩恵を受けた事例として位置づけることができよう。

6-2 B少年事例の特殊性と本論知見の制約

本論は、プログラムの成功例としてB少年の事例を描き出すものであった。だが、一事例の分析

であるために、その制約として留意すべき点は少なくない。この点をつぎにまとめておきたい。

まず、B少年が成功した要因の一つ目として、薬物依存の度合いがプログラムが想定しているものと合致していたということがある。覚せい剤依存がかなり重篤であり、自力でやめたいのにやめられないと苦しんできた。少年院再入院という事実はこのことをよく反映している。もし、数年前の初回の少年院入院時にこのプログラムが実施されており、B少年が受講していたらどうなっていたらだろうか。

この問いは、インタビューにおいてB少年本人にたいして投げかけたことがある。すると、いまほどの気づきなどは得られなかったであろうという回答であった。年齢も今より若く、依存で苦しんだ経験もそれほどではない。そのような点からも、今回のB少年が最適のタイミングでの最適事例だったという可能性がある。

成功要因の2つめとして、少年院在院期間中のかなり早い時期にプログラムがあったという点も指摘しておきたい。プログラム終了後出院までに約半年という期間があった。そのために、母親との関係改善の取り組みや自分史づくりが、通常よりも遅くなった。B少年の場合は、少なくとも、そういった巡り合わせがうまく作用したように思われる。

3つ目としては、他の少年院に入って、移送と還送をしてこのプログラムを受講したのではなかったという点がある。B少年といっしょにプログラムを受講したなかに、ほかの施設から移送されてきた少年が2人いた。3か月のプログラム終了後は元の施設に戻っていった。この2人の場合には移送と還送に伴う悪影響はそれほどなかったようではあるが、うまくいかなかったという事例がこれまでに報告されている。個別担任教官との

人間関係が教育の柱となっている少年院においては、施設移動に伴う少年と担任教官への負担は小さなものではない。それが否定的な影響を生じることもあるわけだが、B少年はX少年院にずっと在籍していたために、そのようなことはなかった。

6-3 学術的含意

最後となるが、本論議論の学術上の含意を3点指摘して結びとしたい。

まず第1点は、「いまここ」に着目する分析の威力と限界である。抜粋3として取り上げたやりとりは、教育指導が効果を発揮している場面と思われた。「学習者」のニーズにたいして特効薬となりうる助言を「教育者」が提供している。すぐに受け入れられないとなると表現を変えながら、説得している。「これぞ効果的な助言」の好例と思われた。だが、後に明らかになったことだが、「学習者」であるB少年の受けとめは違っていた。つまり、教育指導的な「出会い」のもたらす長期的な帰結は、相互作用を見るだけではわからないということだ。

2点目は、第1の論点とも関連するが、「教育」という営みは学習者の受けとめにかかっているということだ。教える側がどれだけ「良い」話をしたとしても、それが受け手のニーズに合ったものでなければ効果がない。教える側に重点を置いた「教育」ではなく、学習者側に重点を置いた「学習」を考える必要がある。

3点目は、「ターニングポイント」は「ポイント」ではないということだ。教育指導などにおいてひとが「変わる」という場合、それは一朝一夕に変わるものではない。教わったことを学習者が解釈して使えるものとしていく必要がある。言われたことの適切さにまず納得する必要がある。そ

のうで、それを実現する方策を考えて実行する。それにはある程度の時間が必要なのだ。野球のようなゲームにおいては、「あの一球」がターニングポイントなることが普通である。だが、ひとが成長し、「変わる」ときにはある程度の咀嚼と実装する期間が必要となるものなのだ。

抜粋付1 「やりたいって24時間思ってる」

(グループワーク1 [1:22:20-1:24:23])

B: °なんか(0.2) え:と:<1番10パーセントぐらいです。>(0.6) () () やめたい(0.2) 気持ち:°(0.4) やりたい(0.2) って:24時間(0.4) なんかよう思って:夢にも見るし:。やめたい理由が:今んところ:(0.2) ないので:(0.2) やめたいこれがあるからやめたい>家族のためとか恋人友だちのためとかってゆうのも<.hh 考えたらあるけどそこまでおっきな活力じゃないっていうか(0.2) 薬物やめるほど:それが大事かっていわれたらそうでもないと思ってしまうし:(0.8) ほかも諦めてる気持ち=べつに(1.0) 少年院とか:その刑務所とか(0.4) がいやって思わへん:=これ(0.4) この:先これ出てから:(0.4) 1回やっただけで:(0.4) つかまって:次(0.2) あの刑務所とか行っただとして:も:(0.4) その1回やる-やれたら:いいって思うんですよ。>普通の人とはたぶん刑務所なんて絶対入りにくくないとか思うかもしれないけど:<.hh 1回-1回たとえ1回で捕まったとしても:その1回ができるんやったら:この少年ここ-今回の少年院生活も:これからの:20代ま-もう無駄にしてもいいっておも-思えるぐらいの渴望感が自分のなかにあるから:。

O:はあ(あ)(あ)

B:っていうのはいい(0.2) そうです。

(チャイムが鳴る)

B:っと:やめる自信は:(0.4) 5パーセントぐらいしかないの °かな:あの° それもだからいっしょで:やめるやめたいっていうのを:もう踏まえてないからあんまり。やめようって思っても:やっぱ自信なんて(0.2) ないもんやのに: .hh だからもう自信っていうものすら自分のなかに(も)(それは)存在しないって感じで(0.4) すね:はい。ちょっと(0.4) 思ったこと:ゆってもいいですか?:

P:はい。

抜粋付2 「自信100パーセント」だった

(グループワーク1 [1:24:24-1:25:52])

B:あの:なんか>わたし<:まえ:になんう(h) ふ(h) う(h) まえになん↓か:(0.6) 前は:1回>やめた期間やってた期間やめた期間:や-やってた期間<今なんですよ。で:まえ:そのやめた期間に:(0.6) もうぜったいやめれるわ:と思って:>もう自信100パーセントやしやりたくないし=あんな生活に戻れるかももうさっきゆったみた-みたいには:もう死んでもぜったいやんな生活に戻りたく-戻りたくない.hh 今が幸せやからって<思ってて:.hh 絶対やりませんってゆって:(0.4) まあ:生活?社会で生活(0.2) してみて:してみら(0.4) 実(0.6) 崩れたんですよね結局。=なんかまあ:すぐは崩れへんかったし:もう()() Aさんゆってみたいには:>自信-やめてることで自信はついてたんですよ:。<.hh あたしは:もうクスリなくてもやっっていける >やっってもいいことないから(.) しんどいことがあってもそれが-それをして解決ならへんからってシ

ラフでゆってたんですよく (0.4) ずっと. けど: まあ >いろんなきっかけがあってけつきよく再犯しちゃってってなったんですけど <.hh そのときに: なんかいま:(0.6) は: かってもう5パーセントとか10パーセントとしかないけど前は: ほんまに100パーセントって思って (0.8) あんときに:(0.4) 自分の: ほんとの姿 >さっきゆってみたいに: そのプログラムやってみて自分の弱さも知ったってゆってたじゃないですか: < そ: ゆ: ふうに: 前のときに: .hh >自分のありのままの姿を認めてあげることができたら100パーセントやり-やめ-やめますみたいなゆわんと: < (0.4) 自信ない: とか (0.4) 自分の姿をみれてたら: もうちよっと 変わったかなと思う部分あるんですよ.

注

*本研究はJSPS 科研費 24330239, 25380698 の助成を受けたものである。調査にあたっては、法務省矯正局ならびに、X女子少年院の方々に多大なる協力と支援を受けた。記して感謝したい。また、草稿にコメントしてくれた研究仲間にも感謝する。

本論文の分析の一部は、2015年9月に早稲田大学において開催された第88回日本社会学会大会において、『「やめる」と言える自分をつくる: 『矯正教育プログラム(薬物非行)』の質的分析(3)』として報告した。有益なコメントに感謝する。

1) 松本; 今村 (2015) は、「薬物やアルコールを習慣的に使っていた人は、薬物・アルコールなしの生活を送る最初の1年間、次の5つの段階を経験すると考えられています」と言う。

- ステージ1 緊張期 (0 - 14日)
- ステージ2 ハネムーン期 (15 - 90日)
- ステージ3 「壁」期 (91 - 180日)
- ステージ4 適応期 (181 - 270日)
- ステージ5 解決期 (271 - 365日)

ハネムーン期については、「離脱期をすぎると、からだ元気になって「よい気分」になります。しかし、いい気持ちになり、「もう大丈夫だ」「もう自分はアルコールやドラッグなしでやっていける」と自信を持ちすぎると再び使ってしまう危険性が高くなります」と述べられている。

また、「壁」期については、「薬物やアルコールをやめて3か月くらいたつと、やめられていることをうれしく感じてころやからだが良い気分で見られる時期をすぎ、壁にぶつかるつらい時期がやってきます。この時期の特徴は、「退屈さ」です」とある(松本; 今井 2015: 16-18)。

2) 抜粋の凡例は以下である(Jefferson 2004; 西阪 2008: 9-13)。記号の使用は議論の必要性に対応しており、使用可能な記号をすべて使っているわけではないことを断っておきたい。特に、「授業」とインタビューとは大きく扱いが異なる。抜粋4をのぞくインタビューでは、聞き手である調査者の受けとめなどは忠実に再現されていない。なお、インタビューは平井と南とで分担したが、トランスクリプト中ではどちらも「R」とし、区別はしていない。

[複数の参加者の発する音声が重なり始めている時点は、角括弧 ([)) によって示される。

= 2つの発話が途切れなく密着していることは、等号 (=) で示される。

() 聞き取り不可能な箇所は、() で示される。空白の大きさは、聞き取り不可能な音声の相対的な長さに対応している。

(言葉) 聞き取りが確定できないときは、当該文字列が () で括られる。

(m.n) 音声が途絶えている状態があるときは、その秒数がほぼ0.2秒ごとに () 内に示される。

(.) 0.2秒以下の短い沈黙は、() 内にピリオドを打った記号、つまり(.) とい

- う記号によって示される。
- 言葉：：直前の音が延ばされていることは、コロンで示される。コロンの数は引き延ばしの相対的な長さに対応している。
- 言- 言葉が不完全なまま途切れていることは、ハイフンで示される。
- h 呼気音はhで示される。hの数はそれぞれの音の相対的な長さに対応している。
- .h 吸気音は.hで示される。hの数はそれぞれの音の相対的な長さに対応している。
- 言(h) 呼気音の記号は、笑いを表わすのにも用いられる。とくに笑いながら発話が産出されるとき、そのことは、呼気を伴う音のあとに(h)を挟むことで示される。
- ¥ ¥ 発話が笑いながらなされているわけではないけれど、笑い声でなされているということもある。そのときは、当該箇所を¥で囲む。
- 言葉 音の強さは一重下線によって示される。
- 言葉： 強勢を伴いながら末尾が少し上がるようなやり方で、区切りがつくこともある。これは、「引き延ばし」の部分にのみ下線が引かれることで示される。
- 。 。 音が小さいことは、当該箇所が。で囲まれることにより示される。
- 。 , ? 語尾の音が下がって区切りがついたことはピリオド(.)で示される。音が少し下がって弾みが付いていることはカンマ(,)で示される。語尾の音が上がっていることは疑問符(?)で示される。
- ↑ ↓ 音調の極端な上がり下がり、それぞれ上向き矢印(↑)と下向き矢印(↓)で示される。矢印が用いられるのは、あくまでも「有標化された」、通常な

らざるものとして聞ける音の上がり下がりであり、たとえば質問のさいによくある語尾の上がりは、通常の音の上がりであるかぎり、そこに矢印が用いられることはない。

- > < 発話のスピードが目立って速くなる部分は、左開きの不等号と右開きの不等号で囲まれる。
- < > 発話のスピードが目立って遅くなる部分は、右開きの不等号と左開きの不等号で囲まれる。
- () 発言の要約や、その他の注記は二重括弧で囲まれる。
- 言' 発声において音が切り詰められているとき、表記の可読性を維持するために、音の切り詰められた箇所を省略符(')によって示すことがある。
- 3) 「やめれる」は方言であり、「やめられる」が標準語としては正しい言い方だろう。だが、この地方では、可能の助動詞としてこのかたちがよく使われている。
- 4) B少年には、A4用紙に手書きで記入してもらった。用紙には、「少年院生活を振り返って」とタイトルをつけて、「薬物から離脱することに向けた自分の気持ち(意欲、自信、希望、不安…)の変化を、自分自身でグラフに記入してみてください。」と指示を書いた。実際にインタビューで記入してもらう際には、「薬物から離脱することに向けた自分の気持ち」を回答してもらいたいと口頭で説明した。B少年は、「薬物に関することですよ」と確認の問いを發して、それが確認されたあとに描き始めた。なお図1は、B少年が手書きしたものを数式で表現してデジタル化した。表2の5地点を通るように設定した。
- 5) 注2の繰り返しになるが、以降では調査者たちとのインタビューからの抜粋となる。聞き手の受けとめ発話は煩雑となるために発言の流れに大きく影響していないと思われるものは省略し

ていることに留意されたい。

- 6) 南 (2015a) は、仲間の受講者と専門家である臨床心理士、少年院教官を、薬物依存経験や指導経験の異同に従って「わかる」の基盤を3分類している。
- 7) 4期において「やめれる」ではなく「やめる」が問題となっていることに留意されたい。プログラム最終週でO臨床心理士は、「やめれる」ではなく「やめたい」と言うことを助言した。やめる自信ができたことで、断薬可能性ではなく断薬意志を問題にできるようになったということであろう。
- 8) 面接が実際に行われた直後のフォローアップインタビューでは、「精神科の先生」という表現がされている(注12を参照)。別の人間が1回ずつ来たのか、B少年の記憶違いであるかどちらかだと思われる。
- 9) 実現可能性の見込み(expectation)が、アスピレーション形成と大きく関係していることは、MacLeodが、アメリカ北東部のある都市の低所得者向け住宅の若者たちのエスノグラフィと追跡調査に基づいて明らかにしている(MacLeod 2004=2007)。
- 10) セルフモニタリングには「多くの利益がある」とRaylu & OeiはBarlow 1991を引用して述べている(Raylu & Oei 2010=2015: 62)。具体的には以下が列挙されている：
- ・自分のギャンブル行動をコントロールするうえで、クライアント自身が積極的な役割を担っていることに気づかせて、治療への動機づけを維持する。
 - ・クライアントは、回復に関する多くの側面について気づくことができるようになる。
 - ・クライアントは、志向、感情、行動の関係について気づくことができるようになる。
 - ・与えられた情報を自分自身と照らし合わせることによって、それを自分自身の個別の状況と関連づけることができるようになる。
 - ・各テクニックがどのように機能し、どのように

影響を与え合っているかを理解するために、構造化された方法で詳細を書き出すことによって、学んだスキルを確立させる。

- ・クライアントのギャンブル行動に関する内的、外的な引き金を特定するのに役立ち、それによって、クライアントは引き金に対処する方略を身につけることができる。
 - ・クライアントが、客観的な方法で自分自身について理解できるようになる。
 - ・問題点や具体的な変化を成し遂げたことを記録することに役立つ。
 - ・進捗状況を評価することに役立ち、それによってクライアントを治療の軌道に乗せる。(Raylu & Oei 2010=2015: 62.)
- 上記は、ギャンブル行動が対象となっている。Raylu & Oei (2010=2015) は、ギャンブル依存のためのワークブックであるからだが、薬物使用にもあてはまるものと考えられる。
- 11) ただし、抜粋14に続く部分では、家族の応援がないため「やめる意味」がわからなくなったと述べている。
- 12) 注8でも指摘したが、「精神科医師」のことを3-3での抜粋12では「(少年)鑑別所の先生」と言ったからだ。話された内容としては同じものであり、どちらかがB少年の記憶か認識の間違いではないかと思われるのだが、前後して別の人間とほぼ同じ内容を話したという可能性も否定はできない。
- 13) 薬物依存者の自助組織であるNA(ナルコティクスアノニマス)の「ベーシックテキスト」には、「本書のなかですべてのアディクトに伝えたいのは次の言葉だ。今日だけ、薬物を使う必要は絶対はないのだ！」(Narcotics Anonymous 2006: xii, 強調は原文)とある。「今日だけ」は「Just for today.」の訳であり、「今日一日」とも訳されている。
- 14) J.MARPPの元となったSMARPPの市販テキストでは、「なぜスケジュールが大切なの？」という節の冒頭に以下のように書かれている：

「スケジュールをたてる」ことは、薬物やアルコールを使わないで一日を過ごすためにとても役立ちます。薬物やアルコールをやめてまもないとき、「何もすることがない時間」はとても危険です。ヒマな時間があると、つい薬物やアルコールでも使おうかと考えてしまい、また使ってしまう危険性が高まります。

(松本；今村 2015: 44)。

- 15) 「依存症とは、まるで自分の脳のなかに、自分の理性だけではコントロールできない悪魔がすみついてしまったみたいな病気です。」とある。
- 16) 少年院の成績評価は、「a」から「e」の5段階でなされる。「c」が標準であり、「d」がつかくと進級が標準よりも遅れることになりかねない。少年院の成績評価を取り上げた論考として、古賀 2012；南 2012がある。成績評価システムの詳細についてはそちらを参照されたい。ここでは、自分のためにやめるという考えをB少年がかためていくのに、「d」がついたことを契機とする気づきが大きく関与していたと述べるにとどめたい。

引用文献

- Barlow, David H. 1991. *Mastering stress: A lifestyle approach*. American Health Publishing Co.
- Beck, Aaron T. 1976. *Cognitive therapy and the emotional disorders*. International Universities Press. = 1990. 『認知療法：精神療法の新しい発展』大野 裕訳. 岩崎学術出版社.
- Gorski, Terence T. 1990. *Managing cocaine craving*. Hazelden. = 2006. 『クレイビングを切り抜ける：薬物依存からの回復のために』麻生克郎訳. Freedom.
- Heritage, J. 1984. A change-of-state token and aspects of its sequential placement. In Atkinson, J. M. & Heritage, J. eds. *Structures of social action*. Cambridge University Press. 299-345.
- 平井 秀幸. 2015. 「自分のせい」と「人のため」から、「クスリのせい」と「自分のため」へ——「矯正教育プログラム（薬物非行）」の質的分析（4）. 日本社会学会第89回大会報告原稿.
- 平井 秀幸；南 保輔. 2014. 「矯正教育プログラム（薬物非行）」の質的分析に向けて：導入の背景とプログラム実施例の概要. 『コミュニケーション紀要』25: 1-29.
- Jefferson, G. 2004. Glossary of transcript symbols with an introduction. In Lerner, G. H. ed. *Conversation analysis: Studies from the first generation*. John Benjamins. 13-23.
- 古賀 正義. 2012. 成績評価の役割と機能：教育的視点から. 広田 照幸；古賀 正義；伊藤 茂樹編『現代日本の少年院教育：質的調査を通して』286-319.
- 近藤 恒夫. 2009. 『拘置所のタンポポ：薬物依存 再起への道』双葉社.
- MacLeod, J. 2004. *Ain't no makin' it: Aspirations and attainment in a low-income neighborhood*. Westview Press. = 2007. 『ほくにだってできるさ：アメリカ低収入地区の社会不平等の再生産』南 保輔訳. 北大路書房.
- Maruna, Shadd M. 2001. *Making good: How ex-convicts reform and rebuild their lives*. American Psychological Association. = 2013. 『犯罪からの離脱と「人生のやり直し」：元犯罪者のナラティブから学ぶ』津富 宏；河野 莊子訳. 明石書店.
- 松本 俊彦；小林 桜児；今村 扶美. 2011. 『薬物・アルコール依存症からの回復支援ワークブック：SMARPP』金剛出版.
- 松本 俊彦；今村 扶美. 2015. 『SMARPP-24：物質使用障害治療プログラム』金剛出版.
- 南 保輔. 2012. 成績評価における相互作用：「変わった」確認ワークの分析から. 広田 照幸；古賀 正義；伊藤 茂樹編『現代日本の少年院教育：質的調査を通して』名古屋大学出版会. 320-342.
- 南 保輔. 2015a. 薬物使用経験を「わかる」の3基盤：「矯正教育プログラム（薬物非行）」の質的

- 分析. 『コミュニケーション紀要 (成城大学大学院文学研究科)』 26: 1-30.
- 南 保輔. 2015b. ダルクスタッフとしての回復: 薬物依存者の「社会復帰」のひとつのかたち. 『成城文藝』 232: 74-47.
- Narcotics Anonymous (ナルコティクスアノニマス). 2006. 『ナルコティクスアノニマス』 第五版日本語翻訳版. Narcotics Anonymous World Services.
- 西阪 仰. 2008. トランスクリプト (転写) の記号一覧. 西阪: 高木 智世; 川島 理恵『女性医療の会話分析』文化書房博文社. 9-13.
- 奥田 保. 2015. ダルクとの出会いについて. 『ダルクとの出会い (ダルク 30 周年記念フォーラム)』日本ダルク. 22-25.
- Raylu, Namrata, & Oei, Tian Po. 2010. *A cognitive behavioural therapy programme for problem gambling: Therapist manual*. Routledge. = 2015. 『ギャンブル依存のための認知行動療法ワークブック』原田 隆之監訳. 金剛出版.

Building Up the Self Who Can Say, “I’m Going to Quit Using Drugs” :
A Qualitative Assessment of “The Corrective Education Program on Drug-Related Delinquency” (2)

Abstract

This paper describes the process a girl goes through, over a period of one year, to build up the will to quit using drugs, while being institutionalized at a female juvenile training school.

A Japanese girl, called B, was arrested for using illegal drugs. She participated in “The Corrective Education Program on Drug-Related Delinquency” at a female juvenile training school in Japan. At the beginning of the 3-month program, she estimated her willingness to quit drugs to be at the level of 10% out of 100%, and her confidence to quit drugs to be at the level of 5% out of 100%. An expert psychologist advised that at the end of the program Girl B should say “I want to quit” instead of “I can quit.” Although this advice appeared to be powerful and effective, it was actually not the case, since Girl B’s mother did not understand the difference between the two statements.

In a research interview, Girl B was asked to make a graphical representation of her change in feelings concerning drugs during the one year at the juvenile training school (self-evaluation). The graph showed that Girl B’s feelings had two big low points: at the beginning of the program and just after the end of the program. After the end of the program, Girl B started writing to her mother for support and to ask to start living with her mother. Girl B’s mother did not understand the nature of drug addiction and demanded that Girl B declare “I’m going to quit using drugs.” Girl B felt really bad that her mother did not understand her.

This was the second time Girl B was held in youth custody. The first time Girl B was released from the juvenile training school her self-esteem was low, and she tried to quit drugs for the sake of her mother, which eventually failed. In preparation for leaving the school for the second time, Girl B started thinking of quitting drugs for the sake of herself. She also thought of quitting “just for today” instead of quitting for life. Finally, just before leaving the training school, Girl B’s confidence level concerning drugs reached the level of 60%.

The study collected video recordings of group work meetings and audio recordings of interviews (self-report). While interaction analysis of group work utterances showed which advice was received as convincing by the participants, its long-term effects and consequences are found to be articulated and identified with interview data.

KEYWORDS: willingness to quit drugs, confidence to quit drugs, self-evaluation, self-report, interaction analysis